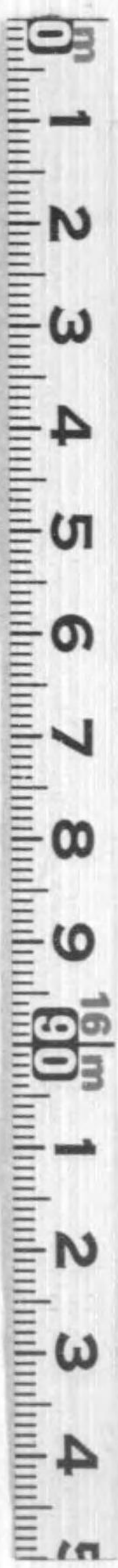


325
231



始



新譯

いふはかるた



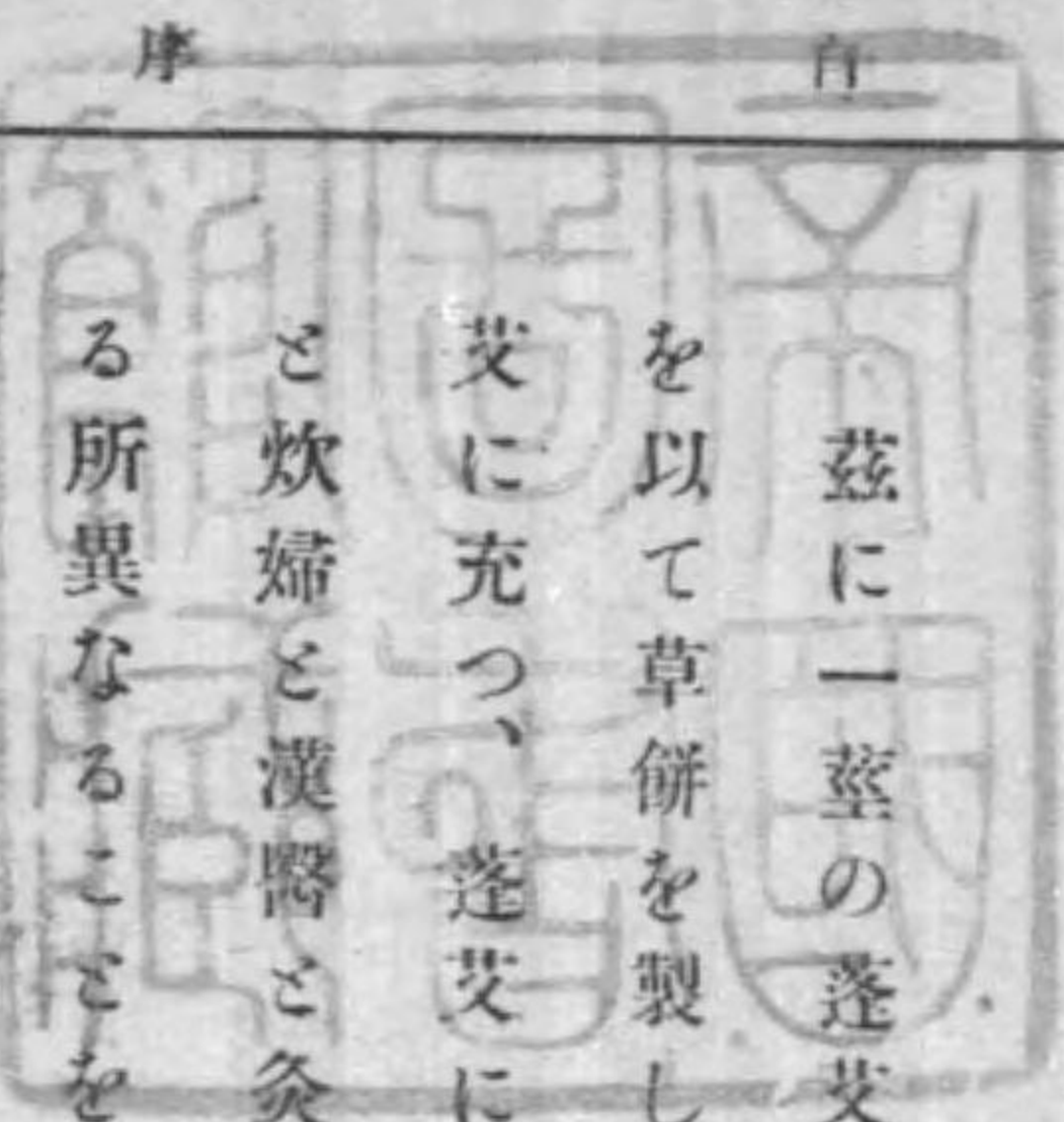
田舎あし

325

231

自序

茲に一莖の蓬艾あり、牧童は之を以て牛に飼ひ、炊婦は之を以て草餅を製し、漢醫は之を藥品に使用し、灸師は之を灸に充つ、蓬艾に局限せられたる用途あるに非ず、唯だ牧童と炊婦と漢醫と灸師と各その見る所異なるが故に、その用ふる所異なることを致すのみ、古聖言はく「醫王の目には途に觸れて皆藥なり、解寶の人は鑛石を寶と見る」と、誠に惟みれば片言隻句の裡に尙ほ甚深微妙の法義を含藏す、況んや四



大正
3.10.15
寄贈

著者 寄贈本

325-23/

I 次 目

いろは 諺 新釋

目次

○ いや／＼三ばい……………一頁

○ 論語讀みの論語知らず……………四頁

○ 花よりだんご……………七頁

○ 二階から目ぐすり……………三頁

○ 佛の顔も目に三度……………一五頁

○ 下手の長談義……………一八頁

○ 豆腐にかすがい……………二〇頁

○ 地獄の沙汰も金次第……………二三頁

11--

序 自 2

十八首のいろは諺中一字含千理の妙味なからむや、著者今僅にその一隅を示す、智者各自三端を扣かむのみ。

大正三年九月の日

京都東寺塔下にて

鳥の舎 吉祥真雄誌

- りんげん汗の如し……………二五頁
- ぬかに釘……………二七頁
- 類を以て集まる……………三〇頁
- 負ふた子に教へられて淺瀬を渉……………三六頁
- 笑ふ門に福來る……………三六頁
- 蛙の面に水……………四二頁
- 夜目遠目傘の内……………四三頁
- たて板に水……………四五頁
- れんぎで腹切る……………四八頁
- 袖のふり合せも他生の縁……………五二頁

- 月夜に釜……………五三頁
- 猫に小判……………五六頁
- なす時の閻魔顔……………六〇頁
- 來年の事云へば鬼が笑ふ……………六三頁
- 馬の耳に風……………六四頁
- 氏より育ち……………六八頁
- 井の蛙大海を知らず……………七二頁
- のみご云へば鏡……………七三頁
- 鬼も十八蛇も二十……………七六頁
- 臭いものに蠅がたかる……………八一頁

○ 暗夜に鐵砲……………八五頁

○ まかぬ種は生へぬ……………八七頁

○ 下駄にやき味噌……………九〇頁

○ 福は内鬼は外……………九三頁

○ これにこりよ……………九六頁

○ 縁ど月日……………一〇〇頁

○ 寺から里へ……………一〇四頁

○ 足元から鳥が立つ……………一〇七頁

○ 竿のさきに鈴……………一一〇頁

○ 義理とふんどし……………一一三頁

○ 幽霊の濱風……………一二五頁

○ 盲目の垣覗き……………一二八頁

○ 身は身で通る……………一三二頁

○ 客番漢のかきのたね……………一三四頁

○ 椽の下に九太夫……………一三七頁

○ 瓢箪から駒が出る……………一三九頁

○ 餅はもちや……………一四四頁

○ 雪隠で饅頭……………一三八頁

○ 雀百まで踊忘れぬ……………一四二頁

○ 京に田舎あり……………一四四頁

いろは諺新釋

鳥の舎著

いやく三杯

いやならば止めるのが宜いのに此上三杯も食べたらお腹を痛めるであらう、然るに嫌なものはつきり嫌とも云ひきらないで、二杯も三杯もたべるのは、つまり意志が薄弱で獨立獨行自己の信することを斷行し得ないのである、情實と云ふことに囚はれたり、境遇が氣にかゝつてそれがために、自ら善である正であると信することにも愚圖々々して、「觸らぬ神に崇なし」位で濟まして行か



うとするのは、所謂義を見てせざる勇なき徒であつて、決して讚めた所爲ではない。

鎌倉時代には多数の高僧が出られたが、その中に梅尾の明惠上人と云ふ大徳があつた、この明惠上人は權勢に諛ふたり、相手の顔色を見て自己の所信を曲げると云ふやうなことをしなかつた、ある時平皇后建禮門院から「戒律を授かりたいから宮中へ来てほしい」と云はれたので、上人が參内して見ると、建禮門院は上座の簾の中にありて上人を下座にすわらせた、上人の云ふには「持戒の比丘は神明をすら拜する要がない、王侯をも敬するを要せぬ、下座にあつて法を説いては説聽共に罰があたる、誰か他人を呼んで來るがよい」と、其處を立ち去りかけた所が、建禮門院はあわて、簾の中から出て、お説をして、上

人を高座に上げて、戒を受け、益上人を敬ふた、又承久の亂に敗兵が梅尾山に匿れて居るのを、鎌倉武士が來て之を捕へ、明惠上人までも捕へて、大將北條泰時の所に連れて行た、泰時は以前から上人の徳を聽いて知つて居るから、庭に下つてねんごろに挨拶をした、上人は「我山寺は殺生禁斷の地であるから鳥や獸の類でも逃げて來て獵夫の害を免れる、だから敗兵も逃げ込んだのである、物を救ふためには生命をおしむな」と云ふのが佛陀の訓である、然るに逃げ込んで來た敗兵を助けぬと云ふことができやうか、若しこれが政治の妨害となるならばわが首を斬りなされ」と云ふて平氣で居る、泰時は涙を流して、「武人は物知らずですから不都合なことをしてすみません、然し今かうしてお目にかゝることが出來たのは偶然の幸でありました」と謝罪して佛法のことを

訊ねた。

代議士その他諸種の選舉にあたりて、自己の權利である所の投票をするのに、運動員の面色によりて投票がどちらへでもグラツクやうな人には、此の話がわからぬだらうね。

論語讀みの論語しらす

論語の訓釋は巧みに出来るけれど、論語の教を實行することが出来ない、と云ふ意味にこの諺を解釋するものがあつたら大きな誤である。昔から「鞍上人なく鞍下に馬なし」と云ふことがあるが、これを「鞍ばかり店前にでもおいてある」と云ふて解する者もなからう、又「山に入りて山を見ず、山を出で、

始めて山を見る」と云ふことを、「山の中では目を瞑いで走つたのだらう」と云ふ頓馬もあるまい、鞍上に人なく鞍下に馬なしと云ふのは、熟練なる騎手はよく馬と相應して居るから、人は鞍の上に跨がつて居る窮屈さを感じせず、馬も亦鞍の上に人を乗せて居る窮屈さを感じないのだ、山に入りて山を見ずと云ふのも同じことで、山を駈け走るのに馴れて居るものは、山の中で走つて居る間は何の苦もなく走つて居るけれど、平地に出た時に始めて「これはいつもと勝手がちがふ、これは平地だな、これまで走つて居たのは山であつたのだな」と氣付く、それを云ふたものだ、「論語よみの論語知らず」と云ふ論語とは道德のことだ、何故に道德のことを論語と云ふぞなれば、論語と云ふ書物は道德の教を書いてあるからである、そこでこの諺の意味は「道德者は道德を實踐して居る

ここに氣付かない」と云ふことだ、味噌の味噌臭きは上味噌にあらず、學者の學者臭きは眞の學者にあらず、道徳者が窮屈がりながら道徳を踐み行ふたり、自分が道徳家であると云ふことが鼻の先にブラツイたりするやうでは到底眞正の道徳者と云はれない、「徳孤ならず必ず隣あり」と云ひ、陰徳ある者には必ず陽報ありと云ふけれども萬更左様でもない、乃公はこれほど陰徳をつんで居るのに一寸も陽報がないし、又乃公が徳を行ふて居るのを誰も應援して呉れない」
杯と云ひ廻るやうなのは道徳家でなくて、道徳を廣告につかつて居ると云ふものだ、論語を読みながら自ら論語を読んで居ることを知らないやうに、道徳を踐み行ひながらそれが窮屈ともわいらいとも感じないやうになつてこそ始めて眞正の道徳者と云ふべきである、世の中の人々が皆論語よみの論語知らずであつて

ほしいものだ。

▲花よりだんご

如何に美しい花が咲いて居ても、それを見るよりは甘いだんごがあれば先づそれにとびつくと云ふ至つて無風流なしわざである、それが如何した、そんなことを今更事新しく云はなくつても判かつて居るが、しかしその風流な花見よりも無風流な食物に走ると云ふことは一體如何したわけであらう、この事實は軽々に看過すべきではあるまい。

ある宗教者は云ふ、神は神自身を模型にして人間を造つた、然るに人間は虚偽の果物を食ふてそれがために墮落したのだと、已に神を模型として造られた

人間ですら食ふと云ふ要求は非常に強かつたと見わてそれがために墮落と云ふ報償を拂つた。

ある學者は云ふ、生物は下等なる物から漸次生存競争の結果遂に今日の人類にまで進化したのだと。して見ればつまり食ふのが巧妙で又食ふのが得意の物が生存を續けて漸次進化したのだ、生物の諸種の能力をコンデンスして、食ふと云ふことに約めたのが人間であるとも云ひ得られやう、いづれにしてもこの通り食ふと云ふことの非常に大切な人間に向つて、食はずに居れと云つても決して實行出来るものではない、然るを花を捨て、だんごに走るものを無風流だと貶すのは無理だ、「武士の子と云ふものはお腹が空いてもひもじうない」とから威張りに威張つて見ても矢張り親雀から餌を貰つて居る子雀を羨ましが

のは眞理である、「一簞の食一瓢の飲陋巷にあり人はその憂に堪へず回や其の樂をあらためず賢なるかな回や」など、云ふのは成程結構な教へではあらうけれども、それは賢なる顔面に結構なのである、所が世の中には顔回のやうな賢者は至つて少く、一般の人は皆「その憂に堪へず」と云ふ分齋だ、だから一般の人には少しも結構な教でない、食はないで辛抱して居れと云ふ教は今日到底通用しない、左様だ食へ、大に食はなきやならぬ。

然らばその食ふのをどのやうに食へば宜しいか、食ふと云ふ中には蚯蚓が土食ふ食ひ様もあらうし豚が泥食ふ食ひ様もある、蚯蚓や豚よりは進んで折角人間まで進化しながら、依然蚯蚓や豚の食ひ様をして居てはつまらないではないか、密教には即事而眞と云ひ當相即道と云ふことがある、當相がそのまゝ道で

あるから態々業務を罷め家を捨て、特別の佛道修行と云ふものにとりかゝるでもなく、生計を治め産業にいそむことが解脱の方法を妨げるでもなく、食ひたいものは食ひながら飲みたいものは飲みながら菩薩の道に進むのである、従つて煩惱を断じて菩提を求めるのではない、貪瞋痴の三毒はさながら三部の徳である、然し我輩は食へく大に食はなきやならぬと云ふた、我輩は食はずに辛抱することや、自己の食ふのをやめて他に施すことやを勧めない、それは到底無理だから、然らば食ふてく大に食ふとはどんなことかと云へば、自分も食ひ他にも食はずことだ否他人を自己にしてその自己が大に食ふことなのだ、是れを菩提心論には「衆生の願に随つて之を給付せよ、乃至身命をも憐惜せず其をして安存せしめ悦樂せしめよ、既に親近しをはんなば師の言を信任せん、

その相親まんに因つて亦教導すべし」と云はれてある、是等が即ち大に食ふべきことを教へられたものである。

花よりだんごと云つたからとてだんごばかり食ふて花には見向かないと云ふのではない、ひもじいのをこらへてだんごも食はずに花を見て居ると云ふやうなことをしないのみで、だんごも食へば花も見るのである、密教に於て大に食へど教へるからとて花見することを忘れては居らぬ、「花よりだんご」さあくだんごも食ふべし花も見るべし、花を見てだんごを食はないのは小乗の厭世教者だ、だんごを食ふて花を見ないのは無宗教の物質主義者だ、吾々は大に食はねばならぬ、また美しい花を見ることがを忘れてはならぬ。

▲二階から目薬

世の中には「宗教を信仰すれば何程の利益があるか、宗教を信仰して居ても米が一斗降つて來ると云ふ譯でもあるまいし、酒が一斗湧いて出ると云ふこともなからう、然るに此の世智辛い世の中に金錢を費して、香を供へたり花を上げたりするのはむだ事ではないか、神佛を禮拜する餘暇があつたら、ねころんで休んで、次の働の準備でもするのがよからう」と云ふ者がある、近視眼にも程があるじやないか、それについて斯様な事實がある。元來人は目で見るものだと考へて居がそれは大きな誤であつて、目で見るのでない手で見るものなのだ、茶席に行つて見よ、主人が珍しい道具を出して客に對する挨拶に何と云ふ、御

自由に手に取つてごらんなさいと云ふではないか、宏大な建築物の側に行つて見よ必ずや柱を叩いて見たり壁をなで、見たりしたくなる、兒童に美しい花を與へて見よ、直に花びらに手を觸れて花を抓つてしまふであらう、是の如く手に取つて御覽なさつたり、叩いたりなでたり抓つてしまふたりすることによつて茲に始めて其物に對する明かな觀念が得られるのだ、手に取つたり叩いたりなでたり、抓つたりしなければその物に對する觀念は甚だぼんやりしたものである、然るに公衆に見せるための博覽會や展覧會に行つて見ると、その陳列品を硝子戸の中に入れてしまつて、手を觸れて充分に見るを許さないのは大なる矛盾ではあるまいか何と云ふか、思ふ存分見られるやうな設備にすることができないものであらうか、けれども萬引と云ふものが非常に流行する世の中だから、

博覽會の陳列品を自由に手にとつて見られるやうにしやうものなら或は五日か七日かの間に陳列品の半數は失はれ又は毀損せられる恐れがあること心配する人があるであらう、その心配は當然だ、然らば如何にすればよいか、見張人を多くして監視を嚴重にしたところで駄目である、少數の客を相手にして居る一個の店先ですら萬引がある位だから、廣い博覽會などではとても目が届かない、物品が失はらないやうに、しかも自由に見られるやうにするには他律的の監視や制裁では到底駄目である、社會全般の道德思想を高めて自律的に他を犯すこと云ふやうなことをなからしめなければならぬ、而してこの道德てふものは宗教を根柢としてのみ繁榮するものである、その證據に、四國の土地には錢箱と賣品とを並べて置いて、通路の自由に持ち行くに任せたる道德販賣法が實行せ

られて居る、これが何故に行はれるかと云ふに通路の篤き信仰が道德に現はれて居るのである、斯様に氣樂な商賣は全國無比であらう、しかし全國民が悉く篤き信仰家となれば、何處の店先にも番人がいらす、倉庫に錠前がいらす、裁判所や監獄なんかは全く不要になるであらう、左様になれば吾人の享樂は米一斗や酒一升位のものでなく、非常に廣大なものである、誠に宗教の信仰と云ふことは二階から目薬の如く迂遠なやうであつて、所謂近視眼者流には氣付かないけれども、到底數字を以て測ることの出来ない効力をもつて居ものである

▲佛の顔も日に三度

佛さまの顔も日に三度お化粧をするそつな、それであんなにピカ／＼光つて

居らつしやるのであらう、と、かう云へば何を馬鹿なことを、佛には三十二相八十隨形好と云つて微妙のお姿があらつしやるのに、お化粧なんてなざるものかと云ふであらう、それならばそれでも差支はないがお互吾々は日々三四度化粧することを怠らないやうにしやうではないか、お化粧と云つたからとて小間物店に賣つてるクラブ洗粉や都の花を買つて來るのではない、古歌に、

たちかへりまたちかへり省みよ

おのが心のまるくなるまで

と云ふのがあり、また古聖も「我日々三たび我身を省みる」と曰はれたてなにか、それだ、日々に三たび省みるがよい、我心には我慾だの嫉妬だの怨忿だのと色々な垢が附着して居るから、慈悲同情の洗粉を以て能く心と心を淨めた

る上に、信仰の白粉や安心の香水を塗つて美しい者とならねばならぬ。今この三界は我がものなり、その中の衆生は皆わが子なり」と云はれた、佛さまのやうな大きな慈悲心は到底吾々の心の中に起し得ないけれど、せめて「同類の飢餓するを見て之を救ふは人の義務なり」と云ふ格言だけ位なりと實行することができるやうにありたいものだ、大都會の貧民窟には八疊の室に三家族程同居して居るのがあり、或は鶏小舎の片隅を借りて住んで居る者すらあると云ふではないか、住居既に是の如くだからその衣食も推して知るべしだ、

雪の日やあれも人の子樽拾ひ

同胞人類の憐れむべき境遇にあるのを平氣で見過すやうな者はたどる日々三度づゝクラブ洗粉や都の花白粉を以てお化粧したとて、決して美しい人となれ

る譯のものでない、小間物店の化粧品以外の目に見ぬ化粧品を以て毎日化粧して、佛さまのやうな美しいものとならうではないか。

▲下手の長談義

ある人が「我輩は詩と書畫とを好きである、然しながら詩家の詩と書家や畫家の書畫は大嫌である」と云ふたことがある、これはつまり本職の黒人になると、妙な所に氣兼をしたり、勿體ぶつたりするものだから、全力を注いだ熱誠のあふれる點がないからである、相撲にしても黒人には八百長があつて觀客に嫌氣を起させる、是と反對に素人は成程技倆に於ては拙いが、熱心に渾身の精力を集めてやるものだから、何人も思はず知らずそれにつり込まれてしまふ、

智積院の學匠運敵僧正が若僧時代に、門前の餅屋の主人にたのまれて、大佛餅の看板を揮毫したのが、僧正の一生涯に於ける揮毫の中で一番よくできて居ると云ふことだ、狩野探幽が書生時代に沂江の某旅宿で金襴を見て描きたくてたまらず、亭主のいやがるのを、私に夜半に起き出でて山水を描いて、夜逃げしたことがあつたが、後にそれを見て我ながらその妙筆に感心した、その山水が探幽生涯中の傑作であること云ふことだ、説教にしてもその通りで、談義僧とか説教師とか云はれるものになると、長くも短くも面白くも可笑しくも悲しくも辛くも随分巧妙に談ず、けれどもあとで聽者が「上手な説教師だな」と感ずる餘裕がある、説教下手な坊さんが自分の信仰を全部さらけ出して、時間の経つのも氣付かぬほど熱心に説いたならば、必ずや聽者に信仰の光を傳へるこ

とができる、説教談義にかぎらず、書畫詩歌にかぎらず、世の中のこと大概左様である、猿が樹からおちたり、河童が河で流れたりするものも、下手の長談義に價値のあることを裏面から證明して居るではないか。

▲豆腐に鋸

「何だ馬鹿々々しい、豆腐に鋸を打つて何になるものか」と叱るのは暫く待つて貰ひたい、「何になるものか」とは少し聞かないやうに思ふ、人間のことは果して何かになることを豫料してやつて居るであらうか、農夫が稻を作る、何になる、食物になる、食物にして食ふて何になる、生きて居る、生きて居て何になる、矢張り農夫である、學者が學問する、何になる、新しい發明が果して人類

の幸福を増すや否や疑問である、假に幸福を増すものとしてそれが何になる、あゝ止せ、何になると云ふ結果を論ずることは止めにしやう、人間のことは大概何になると云ふことよりは唯だやるべきだと思ふてやるのである、平生の生活はその通り何等の効果を豫料せずやつて居りながら、佛の大慈悲に絶れ宗教の妙味を味はへと云はれると直に、宗教を信仰してごだけの御利益があるか、現實に靈驗があるものならば信仰しやうと云ふものがある、餘りに現金すぎるじやないか、「親鸞に於きては、ただ念佛して彌陀にたすけられまひらすべしと、よき人のおほせを蒙りて信する外に別の子細なきなり、念佛はまことに淨土に生るべき種にてや侍らん、また地獄におつべき業にてや侍らん、總して以て存知せざるなり、たどひ法然上人にすかされまひらせて念佛して、地

獄におちたりとも後悔すべからず候」と歎異鈔に云はれてある、淨土に生れる
 たねならば念佛する、地獄におちる業ならば念佛せぬ杯とは云はない、是れは
 全く念佛はすべきものと堅く信じて居るから、何もその結果に就て考へる必要
 が起らないのである、何れの宗教でも信仰は其様なものだ、豆腐に鎚を
 からう、何故鎚を打つ、割れかゝつて居るからよ、此上に「鎚によりて破壊を
 防ぎ得るか」と問ふのは無理である、何事によらず自ら信する所あればその効
 果の有る無さを詮議する要はない、その理想に向つて専心に進むべきだ、然る
 を世の風潮が頹廢しかけたのを矯正しやうとしても効力はなからうとか、青年
 の氣風が墮落したのは時勢だから詮方ないとして捨て、省みないでよからうか
 楠公や文天祥や孔明や乃木大將やは決して左様はしなかつた。

▲地獄の沙汰も金次第

未決監にある者が保釋金を出すことによりて歸京を許されることか、否々々
 んな陳腐なことではない、至つて古い所の新解釋を試みることにしやう。
 付法藏傳によると、昔の昔の昔安息王と罽𑖅王とが戦争して大激戦の結
 果、罽𑖅王は勝ちに乘じて九億の安息人を虐殺した、それがために地獄に墮
 ちたが、後に馬鳴菩薩の説法を聞いて地獄の苦は免れ大海の中に生れて千頭の
 怪魚となつた、而してその海の中に劍の輪があつて、それが廻はつて来て首を
 斬り、斬られると復た生する、斯様にして須臾にして頭が大海に滿ち動くこと
 も出来ない様に苦しんで居たその時に罽𑖅王即ち怪魚が僧侶の取締をして居

る羅漢の僧に頼むには「鐘を鳴らして下され、鐘の鳴つて居る間は私の苦が休まるのです、絶えず鳴らして下されば私の苦が全く免れられます」と、そこで續けさまに鐘を鳴らして居た所が七日の後に全く劍輪の苦を免れた、此の因縁からして此寺には常に鐘を鳴らすことになつた。

名義集にはまた斯様なことが出て居る、昔或人が死んで三日の後に蘇生して、死んで居た間の事を物語りした「私が冥途へ行たところが先の國王が縛られ苦しんで居たから驚いて其の所由を聞くと、生きて居た間に多數の人を殺した罪によつてである、私が甦生するのを大層羨ましがりて傳言があつた、それは國に歸つたら今の國王に左様云つて寺に鐘を鳴らすことにして呉れ、さうしたら私の苦は休まるからと云はれた、だから先の國王のために鐘を鳴らすことにし

やうした。

鐘をつく時の頌文に

一 打鐘聲 當願衆生

脱三界苦 得見菩提

(一たび鐘を打たん聲ごとに、まさに願ふべし、衆生三界の苦を脱れて菩提を得見せん)

と説かれたのである。

是れからして地獄の沙汰もカ次第と云ふのである。

▲りんげん汗の如し

綸言は汗の如く一度發すれば元に戻すことも取り消すことも出来ない、周の成王が戯に弟を封じたのすら周公の諫によりて止むなく齊國を興へたと、是れは餘りに窮屈で困る、宜しく「客言汗の如し」と云ふべしだ、客齋漢の言ふ所を聞け、「成程それはお氣の毒ではあるが義捐する程の餘裕がない」とか、「折角お勧め下さつても書物を讀む暇がないから買へません」とか、「モ少し御馳走する筈でしたが過日來不漁で何もありません」とか云つて、出すことゝ云ふたら風邪の時に藥飲んで汗を出すのすら嫌ひで、取ることなら色男のニキビ取るのでも好きだと云ふ有様、其の汚くうるさいこと恰も汗の如しだ、依て客言汗の如しと云ふ。又恪喧汗の如しとも云ふ、恪喧とは恪氣喧嘩の略稱だ、世に「夫婦喧嘩犬も喰はぬ」と云ふのは、その至つて汚はしいから云ふたのもので

丁度汗は汚くして如何に濁したる時にも飲料水の代用にするこの出来ないのと同じである、尙一つ隣軒汗の如しと解して見るならば大分異つた意味が出て来る、前々の解は汗を汚い五月蠅いとはかり云つたが、それは汗に對して氣の毒である、汗は體温を調節し體の不淨物を運び出す等甚だ重要なものである、さうすると隣軒即ち向三軒兩隣は云ふに及ばず、遠い親戚よりも近い他人、近隣は我にとつて重要な御恩のあるものであると云ふことだ、此様に大切にあらから隣人に對して客言や恪喧を決して爲ないやうにするがよい。

▲ぬかに釘

糠と云ふものは貴いお米の家來だけありて感心なものである、浴湯に於て能

く人體の垢を去り、脚氣病者にとりては唯一の靈藥なり杯と三才圖會風の説明はお預りとして、糠は實に温和な優しいものである、釘を打ち込まむとすればその打ち込むに任せ、またその釘を抜かむとすればその抜くに任せて、少しも逆ふと云ふことがない、世に所謂お人善しと云つて何様にせられても何とも云はないでじつとして居る様でも困るが、さりこて甲と云へば乙と答へ、西と云へば東と對ふるやうでも困る、だから垢膩を去る力も、脚氣病を治す力も、木材を磨て滑にする力も、乃至薰べて蚊を退け、牛の腹に入りて滋養になる力もありて、而も「柔よく強を制す」「温和なるものを破る力なし」杯と云ふ格言を守りて、釘の打ち込むに任せて居れば平和の暮しをすることが出来るであらう、ある豪家に美しい庭をもつて居たが、時々悪戯兒童が垣の外から石を投げ

込むので困つて居た、ある日お嬢さんが庭に出て見ると、お鍋が二人の兒童を捕へて「お嬢さん、このあいだから石を投げ込んだのはこの悪太郎と椀白造とでございます」と云ふと、二人は聲を揃へて「僕等知るもんかい、とぼけやがるな」と云ふ、お嬢さんはにこ〜顔で「あなたがたはまだこの庭を見たことはないでせう、まあ這入つてお遊びなさい」と、二人の兒童を連れ込んで、美しい櫻や山吹の花を興へなごして、「こゝ數十日の後には牡丹が咲くからその時に來たら牡丹の美しいのと青梅とを上げますよ、しかしその時に悪戯者の石がこびこんであなたがたに傷をさせては氣毒ですわね」など云ふて歩いて居たら、二人の兒童は「お嬢さん、お赦し下さい、石を投げ込んだのは僕等です」と白狀したそうなる、糠に釘」決して馬鹿なことを云ふのでない、此の格言は家庭の奥

様方に特に能く心掛けて居てほしいのである。

▲類を以て集まる

梵語の曼荼羅は譯して輪圓具足と云ひ聚集と云ふので、更に平たく云へば、「類を以て集まつたもの」とでも云へるだらう、淨土教の人は觀無量壽經の曼荼羅即ち所謂當麻の曼荼羅のことを常に曼荼羅と云ふて居るが、曼荼羅には星供曼荼羅尊勝曼荼羅觀率曼荼羅杯色々あつて、その根本となるものは金胎兩界の曼荼羅であるから、金胎兩界の曼荼羅のことを少しく説明しやう。金胎兩界と云ふのは金剛界と胎藏界とであつて、胎藏界は「本有の理だ」と云ふから、潜在せる性能とでも云ふべきだ、金剛界は「修生の智だ」と云ふか

ら、發現せる力用とでも云ふべきだ。金剛界曼荼羅は井田のやうに九會に分れて居る、その圖を示すと次の通りである。

理	趣	會	十七尊
一	印	會	唯一尊
又云成身會	羯	磨	會
一千六十一尊	三	昧	耶
會	七	十三	尊
四	印	會	十三尊
供	養	會	七十三尊
微	細	會	七十三尊

中央の羯磨會又は成身會と云ふて、成佛の事業が成就したことを表はすのだ、

是は四種曼荼羅の中の大曼荼羅に當るのである、第二に三昧耶會は成身會の諸尊の本誓意趣をば、刀劍輪蓮華等の形に表はしたものであつて、四種曼荼羅の中の三昧耶曼荼羅にあたるのだ、第三に微細會は成身會の諸尊が衆生を教導する化儀の不可思議なることを表はしたものであつて、四種曼荼羅の中の法曼荼羅にあたる、第四に供養會は成身會の諸尊の中で大日如來を本尊となし、自餘の諸尊が大日如來に種々の供養を奉るのであつて、四種曼荼羅の中には羯磨曼荼羅に當るのである、これまで四會に於て四種曼荼羅を別々に説明したが、元來四種曼荼羅は離れることの出来ないものであるから、その意味を表はすのが第五の四印會である、一尊一尊の四曼が離れないのみならず、甲尊の四曼と乙尊の四曼とが互に相離れないのだから、諸尊が終に大日如來一佛に歸してしまふ、これが第六の一印會である、第七の理趣會は一印會の大日如來が菩薩の身を現して利他の作用をなすのである、第八の降三世羯磨會は大日如來が利他の作用をなすのに、菩薩の形を現すばかりでなく、大忿怒の相を示して三毒煩惱を降伏することを表はすのである、その本誓意趣をば弓箭劍戟等によりて示したのが第九の降三世三昧耶會である。

胎藏界は十二院に分れて居る、その圖を示すと次の通りである。

中臺八葉院は衆生の八瓣の肉團心の上にある阿字本不生即ち地水火風空識の六
大を總稱したもので、大日如來等の九尊ある、遍知院は六大の中の識大の徳で
ある、持明院は識大を除いた餘の五大の徳を表はすのである、觀音院は大悲の

院部剛金外		文殊		除蓋障院	外金剛部院
院殊		院釋			
地藏院	觀音院	遍知院		金剛手院	外金剛部院
		中臺八葉院			
		持明院		虛空	外金剛部院
		藏地院			
				院部剛金外	

合計四百十四尊

徳、金剛手院は大智の徳である、虚空藏院は萬徳圓滿せることを表はすので、
つまり悲智を綜合して缺けた所がないことを表はす、釋迦院は悲智の二徳が方
便となりて世界に現はれて來た所、文殊院は釋迦院からして更に派生出する
徳を表はす、地藏院は觀音の慈悲から派生出して來る利他の徳を示す、除蓋障院
は金剛手院の智慧から流出して、佛果に到るのに蓋障となるものを除く所の自
利の徳を示すのである、蘇悉地院は上に述べた諸徳皆成就して缺ぐる所なき意
味である、外金剛部院は一切の天龍鬼神等を集めて、是等のものも皆大日如來
の變化であつて、佛法を守るものだと云ふことを表はすのである。
以上が茶羅に就て最略の説明であるが、諸尊がそれ／＼類を以て集まつて
居ることが判るであらう。

▲負ふた子に教へられて淺瀬を渉る

觀佛三昧經に釋迦如來が其父淨飯王に説法したことが出て居る、大略を述べ

る。佛が父王に言ふには、諸佛が世に出ると身口意三種の利益がある、一には佛が口にお説法をする、衆生が現世には迷を去りて智慧を開き、未來世には佛の側に生れて佛果を得る、二には諸佛の御身に光明や美しい相好がある、それを衆生が觀念すれば現世には四重五逆の罪惡を除き、未來世には思ふ儘に淨土に生れて成佛する、三には念佛三昧をお勧めする、と、父王が佛に申すには、佛果の徳とか眞如實相とかのやうな勝れた法を勧めないで、何故に念佛三昧を

勧めますか、佛の語るには、佛果の徳とか眞如實相とか云ふことは餘り深く六ヶしいので到底凡夫にはわからないから、易い念佛三昧を勧めます、此念佛三昧の功徳は、譬へば一寸香を嗅いででも死んでしまふ程の毒氣のある樹の林に、些細な栴檀の香木が生へると、其香氣のために毒樹の毒が全く消されて美妙なる林となるが如く、衆生が佛を念じて居れば、必ず佛の側に生れる、而して一旦往生したら從來の三毒諸惡は忽ちに消れて、大慈悲清淨の心になることができる、と。

これ淨飯王がわが子釋迦如來に教へられて、容易く生死の河を渡る方法を知つたのであるから、負ふた子に教へられて淺瀬を渉ると云ふものだ、尤も右に念佛と云つたのは南無阿彌陀佛と口に唱へることではなくて、心の内に佛陀

の相好とか慈悲とかを念ふことである。

▲笑ふ門に福來る

大黒さんや蕙美須さんは笑ふて居るから福が來て神さんに成られたのか、福神だから福をタント持つて居るのが嬉しくて笑ふて居るのか、福神心理学をやつて見なければわからないが、帝國大學の心理学教室にもまだ福神心理学の講座は開かれて居ないそうだから致し方がない、生理學者の説によると笑は健康を助けるものがある、笑ふと内臓が盛に運動するから消化をよくする笑ふと呼吸を大きくするから肺臓によい、笑ふと筋肉を寛ろげるから血液の循環をよくするなんどと云つて居る、何はともあれ、家運長久繁昌息災の眞言として

オンニコニコハラタテマイゾヤソワカと云ふのがある云ふから、笑ふと云ふことは徒らにゲタ／＼笑ふことでなくして腹を立てないと云ふことの替へ言葉と思ふて居ればよい、佛教に於ては不瞋恚を十善戒の一に數へ擧げてあり、また菩薩の修行する六波羅密の中にも忍辱波羅密があり、腹を立てずに堪忍して行くのが非常に大切なる修行としてある、従つてお經の中にも「忍の徳たる持戒苦行も及ばず、能く忍を行する者を名けて有力の大人となす」とまで説かれてある位だ、世間で云へば「一朝の怒に其身を忘れて其親に及ばず、惑へるに非ずや」と云つてある、諺にも「怒る者は與みすべし、笑ふものは測る可からず」と云ふのがある、大船のいかりと人のいかりとは、うちしづめてぞ用はなすなれ。

どれほど賢い人でも怒つたならば全く餘裕のない所まで行きつまつたのであるから決して善い分別の出来るものでない、善い分別が出ないからして平氣の時よりは劣つたつまらないことをやり出して失敗するものである、利巧者は此理を應用して人と談判する際に故意と相手を怒らして勝を制せんとすることがある、だから常に笑ふ練習、怒らない工夫をして福を招き災を拂ふ様にしなければならぬ。

以上の説明は笑に就て、熙怡微笑とか會心の笑とか云ふ善意の方面であるがまだ此外に嘲笑とか冷笑とか嗤笑とか云つて、輕侮の動機から發する所の謂は、惡意の笑がある、是れも笑の種類ではあるが、笑ふ門に福來ると云つたからとて、斯様な意地の悪い笑に福が來てたまるものか、斯様な他人を輕侮する笑には福の代りに獲が來る、顛覆とか覆滅とか云ふ覆が。

▲蛙の面に水

世人は此諺を以て破廉恥鐵面皮の意味に解して居る様だが、それは蛙に於ては如何にも迷惑なことで氣の毒に堪へない、故山縣僧正の説を借りて云ふならば、蛙には戒定慧の三學がある、濁水壺に陥りて其命旦夕に迫りて居る時にも必ず規律を守りて、最年長者が發頭してギャロン／＼と云へば其他の大衆聲を揃へてギャロン／＼と云ふ、此の通り規律を守りて亂れないのは蛙の持戒である、有害な毒蟲を征伐したり、夕顔棚の下の夕涼を慰めるための音樂を奏でたりして、夏の間利他のために活動して居たのが、秋になると土中に隠れて、

半年の間飲まず食はず全く無識身三摩地に入るとはでないか、是れが蛙の禪定である、夏の日天曇りて雨降らんとせる時、蛙は直に法然具足の薩般若智を以てその雨降ることを豫知し、カクカクと鳴いて天氣豫報をやるではないか、是れが蛙の智慧である、斯の如く三學を行じて心中大に得て居る所があるから些細な水や雨やがかゝる位は何ともない、それとも錐で突いたり小刀で切つたりせられるのを知らぬ顔で居れば厚顔とも鐵面皮とも解せられやうが、痛くも痒くもない水ぐらゐに何の騒ぐ必要があらう、讀者諸君小野道風ではないが蛙の教訓を遵奉して、毀譽褒貶を超越する様に修養しやうではないか、平素如何程豪く見ても、心に疚しい所のある者は、自己の事が少しでも世評に上ると、逆も蛙の面に水の様に平氣の平左衛門をきめこんで居られないからね。

▲夜目遠目傘の内

組末な反物でも夜目に瓦斯の光で照して見ると美しく見ね、拙いペンキ塗の畫でも遠目に見ると美しく見ね、二満三平の青黒い醜婦でも絹張の洋傘の下から、半面を出して居ると別嬪に見ねると、斯様なことぐらゐは何人でも知つて居る、事々しく書く必要はないのだが、一步進めて夜目遠目傘の内が美しく見えるのは何故だ、夜目に美しく見えるのは判然しないからだ、何故か知らんが、おほかた缺點があつてもその缺點が見付からないからであらう、判然しないものは美しく見える、宗教上崇拜の對象は皆この判然せない所がありがたいのだ、阿彌陀を無量壽とか不可思議光とか云ふが、無量とか不可思議とかは判然

しない語である、大日を除暗遍明とか遍照金剛とか云ふが、遍と云ひ金剛と云ふのは判然しない語である、白粉を洗ひ除きたる基督だとか、後光を取り去りたる釋迦だとか云ふのは畢竟蛇足である、斯く云へば宗教上の對象はつまらない様であるが、獨り宗教上の對象に限らず世の中のこと大概それである、委しく云はぬが花であらう、遠目に美しく見ゆるのも夜目と大抵同じことだ、雜誌や新聞で名を見たり、演壇に立つて喋舌つて居るのを聞いたりと、大層立派な人の様でも、膝をつき合せて話して見ると案外つまらなかつたり、一度逢ふただけでは眞面目らしい人、親切らしい人が、久しく交際して見ると、随分放逸な人薄情な人であつたりすることがあり易い、此遠美近醜と云ふことは空間的一時代にあるに限らず、時間的に歴史の上にもあるのは勿論である、傘の

内、傘とは何だ、背景である、服装も、背景である、財産も背景である、地位も境遇もみな背景である、虎の威を借る狐、上官を笠に被る俗吏、學校風を吹かす卒業生、外國熱を吐くハイカラ、若し彼等から財産地位親分其他一切の背景即ち傘を奪ひ去つて、而も尙ほ二滿三平の青黒い顔を見せない者あらば、それこそ眞に美人である。

▲たて板に水

横領とか横着とか云つて横はよくないことであるが、堅もあんまり感心しない、二十悪のたち並びたる其中に貪慾ぼうのせいの高さよと云ふことがあり腹たてると云ふこともあるじやないか、横に臥てござる釋迦様には二月十五日で

なければ参り人がなし、立てござる阿彌陀様は未來往生の外には御手が届かない、弘法大師様は臥てござらないから日々の影向をかがす處々の遺跡を訪ふて有縁の信者に接し遊ばす、また立つてござらないから現當二世の御利益を以て衆生をお救ひ下さる、大師様の持つてござる五鈷杵でも堅ごもつかず横ごもつかず斜に持つてござるだらう、あゝ大師様が坐はつて五鈷杵を斜に持つてござるのは、堅に時間横に空間、總てに亘りて衆生をお救ひ下さる思召を表したものにちがひない、まあ斯様なことは且らくぬきにして、立板とは何だ、前に、「十惡のちぢ並びたる」と云つたその意味で貪慾瞋恚愚癡邪見等の悪い心である、水とは何だ、佛教では昔から智慧の水とか慈悲の水とか云つて居る、それだ、水とは義理道理信心菩提心等と云ふことだ、立板に水を注いだところが少

しもたまらないのと同じく、貪慾瞋恚愚癡邪見の者には義理や道理は解らない信心も菩提心も發らない、信心とか菩提心とか云ふのは佛の側から云へば大慈悲であるから、信心の發らないと云ふことは佛の大慈悲が頂かれなると云ふことだ、仍て佛の慈悲を頂かんと思へば板をたて、置いては駄目である、板を倒して始めて水を注いでも甲斐があると云ふものだ、此の板を倒すのが自力、水を注ぐのが他方で、之を眞言宗では以我功德力如來加持力と云ふのであるが、我々が愚痴邪見の心を押へつけて信心を發す心になるのは自力でもあらうけれど、信心を續けて行くことによつて汚い心が漸次に淨くなること恰も澁柿が日に照らされて漸次に澁味が減るやうなものである、淨土眞宗から云へば信心すれば救ふて下さる、その信心も自發でなくて阿彌陀如來から下さつたものだ、

立板を倒すのも自力でなくて矢張り水を打ち付けて倒したのだと云ふ、何れにしても立板を倒すことが肝要だ、爾うでないとも水を注いでも甲斐がないじやないか。

▲れんぎで腹切る

如何な貧乏武士でも樞木なんかで腹切らなくても何か及物がありそうなものだ、左様ども左様ども樞木で腹切る馬鹿があるものか、廉義で腹切るのだ、清廉道義のために腹切るから廉義で腹切ると云つたものだ、所が近頃は出刃庖丁や短刀で自己の腹ばかりか、他人の首きつたり咽喉突いたりする者は多數にあるが廉義で腹切る者が幾程あるか、一國の大宰相が國民から不信任を唱へられ

て尙ほ自己の清廉を證明することも、罪を天下に謝することをもしないで、強辯を弄したり、質素武勇を生命とせる軍人が出所不明の財を積んで驕奢を極めたりして居るものがあり、名利を離れ世道人心の燈明臺となり、社會民衆の儀表となるべき筈の宗教家教育家杯の行動にも随分如何はしいものがある、ソークラテースは冤罪を蒙りて獄中に繋がれ、死刑の執行も一兩日に迫つた時に、友人クリトンが脱獄の方法を運らして、脱獄せんことを勧め、『生命の助かり得べき時に死ぬのは善ではなく、又ソークラテースが死んだら妻子が困るであらう』と云ふたが、それに對するソークラテースの答に『衆愚は何とでも云はれ云へ、吾は道理と智慧ある人の意見に従ふまでのことだ、悪黨どもが吾を獄に入れやうと死刑に墮さうと、吾に於ては何等のさしさわりは無い、人たる者

は善良なる生活をなしてこそ生命の價値もあると云ふものだ、だから人が何ぞ云はうが妻子が難儀しやうが左様なことは問ふ所でない、唯だ考へなければならぬのは脱獄することが正しいことか否かである、冤罪であるから脱獄してもよいと云ふ道理があらうか、吾は「人に害を被らすことは悪であり、又惡に報ふるに惡を以てすることも惡である」と常平生主張して居たのであるが、今はその徳義上の主義が變化すべきであらうか、脱獄と徳義とは兩立すべきであらうか、又法律から云ふても勿論脱獄が正しい行為とは云はれまい、クリントン君よ、異存があらば云へ、云ふことがなければ吾はこの儘死刑に就かう」と、何と花々しい廉義の腹切ではないか、伯夷叔齊も田横も廉義で腹切つた連中である近くは村田保翁も太田三次郎氏もその連中である、廉義で腹切る人は益多いのがよい。

▲袖の振合せも他生の縁

「停車場の改札係や電車の車掌なんかは他の人に比べて袖を振り合はすことが大層多いが、彼等は前の生に於て特別に多くの人と縁を結んであつたのか」とか、「西洋人は振袖を着ないから袖を振り合はすことではない筈だが彼等は前世に縁を結ばなかつたのか」と云ふのは餘りに偏狭な言ひ分た、禮記に「尊客の前にて犬を叱らす」と云ふのがある、「それならば客の前で人を叱るのは禮に外れないか」と云つたり、「秀吉手兵五百騎を提げて來り援ふ」と云ふ文句があるからとて「秀吉は騎兵を提げる程大きな手が五百本もあつたのか」と云ふ

野暮もあるまい、物事は一端を見て他端をも推して知るべしだ、さて此諺の本意は「袖の振合はせ」の句でなくて「他生の縁」と云ふ句にある否更につめて云へば縁の一字にある、袖の振合はせですらも他生に於て縁があつたのだ、況んや一つ溪の水を掬ふて飲み一つ樹の蔭で休息するに於てをや、互に名を呼び呼ばれて相語る者に於てをやだ、此説明はまだ他生の句や袖の振合はせの句に滯つて居る、この二つの句を離れて考へて見ると如何であらう、他生に於て縁があつたのみならず今生現在に於て縁がある、而もそれは袖を振合はすと云ふやうなことがなくても、倫敦の市中の者と臺灣の山中の者との間に縁がある、西伯利亞の北海岸の者と南亞米利加の南端の者とも縁がある、五千年昔の埃及人と今日の日本人との間にも縁があり、今日の佛蘭西人と一萬年後の支那人と

の間にも縁がある、例へば今一椀の茶漬飯を食ふとする、その膳椀箸皿米漬物の間にも縁がある、例へば今一椀の茶漬飯を食ふとする、その膳椀箸皿米漬物は何人が造つた、その膳乃至茶を造る人は何を食ふて生きて居て、その食物は何處から何人が取りよせて供給した、その食物を造る道具を拵へた職人とその職人の生活品とその仕事に要する智識とは何處から得來つたか、この通り一椀の茶漬飯にも無限の力が働いて居る、これを佛教では衆生恩と名け四恩の隨一として父母國王三寶の恩と並べて教へるのである、袖の振合せも他生の縁と云ふ諺を聞けば、直ちに衆生恩の尊きを覺るがよい。

▲月夜に釜

月は下から見上げられ釜は上から覗き込まれる、月は何處からも見わる謂は

公明的であり、釜は厨屋の隅に隠れて居る謂は、隠匿的である、月は冷かく静かにして釜は熱く沸き返る、月は白く明るく水に縁近く釜は黒く暗く火に縁がある、これほど極端に性質の反對して居るにも拘はらず、月の監督範圍なる月夜に釜の出しやばる餘裕があるであらうか、ある／＼、聖帝虞舜の時にも三苗の如き悪漢が出た、孔子の門人でも二千九百三十人は大した者にならなかつた、釋迦世尊の時にも摩羯陀國九億の人民中三億人は法を信じしたが、三億人は法を信じなかつた、其餘の三億人は釋迦佛の存在すら知らなかつたと云ふではないか、近い所で云ふならば、聖德無比の明治天皇の御宇にも無政府主義を企てるものが出た、大正の聖代に於ても非立憲の閥族が跋扈して居る、數へ来れば幾らでもある、しかし斯様に何千年の昔幾千日の過去何千里の異國幾萬尺の

身外と云ふやうな遠い所のことよりも近い所に心を注がねばならぬ、最も近い所とは何であらう、時間から云ふても空間から云ふても、只今の我心程近いものはなからう、只今の我心、成程吾人は此の最も近い處に注意しなければならぬ、月の如く白く明るく公明であつて人から見上げらるべき筈の心に、釜の如く黒く暗く汚點がありはしないか、釜の如く愚痴の火に煽られ瞋恚の湯が沸き立つて居りはせぬか、釜の如く片隅に隠れて人前に出すことの出来ないやうな思想や人から見下されるやうな事がありはせぬか近江聖人中江藤樹先生の歌に

うつし見よ向ふ心の水鏡
あをぐもふすも身よりなす影

と云ふてあり、長宥匡大僧正の歌にも

よしあしの人のわざこそかへりみる
 おのが心の鏡なりけり
 と云ふのがある、反省することが大切だ。過去は捕へられない、未来は豫期せられない、現在只今の我心を充分に詮議することが必要である、何時も何時も只今の我心を。

▲猫に小判

猫と云ふ動物は欲ばりのイヤシイお世辭好きな獣だから、何時も何かほしうにニヤン／＼と云ふて人の膝に上りたり足に絶りついたりする、つまり猫は物質的欲望の代表者である、小判と云ふのは金貨である、金貨とは財産である

物質的富の代表である、物質的欲望の對象物を表象するものである、そこで次の通りに置換して考へて見よう。

詳…小判＝物質的欲望・物質的

猫には小判、物質的欲望には物質的富、従つて精神的欲望には精神的富が必要である、と、是れだけ云ふたら諸君諸君の中には早速手を出して、「吾輩は物質的欲望を持つて居るから物質的富を呉れろ」と云ふ氣の早いお方があるかも知れぬ、しかし一寸待つて貰はねばならぬ、何故と云ふに物質的富を今直に與へるのに手間は無いが、鳥の舎は今直に物質的富を與へる程不親切でもなく、又それ程までに諸君を輕蔑するものでないからだ、物質的富と精神的富と孰れが尊いかを先づ攻究して貰ひたい、古聖が何と云つた、「富は屋を潤ほし、徳は身

を潤ほす」だと、また「倉の内の財は朽つることあり身の内の財は朽つることなし、千兩の金を積むと雖も一日の學にはしかず、兄弟常に合はず慈悲を兄弟となす、財物は永く存せず才智を財物となす」とも云つてあるではないか、物質的富を求めるよりも精神的富を求めるがよい。

酒の池肉の林にありとて

こゝろ飢わては甲斐やなからむ

山川のふちのさいれもかぞふべく

見ゆるは水のすめばなりけり

精神的富が物質的富よりも力強いことは日清日露の戦役に於て證明せられたであらう、古河市兵衛が憎まれて田中正造が愛せられ、桂公が嫌はれて乃木大

將が敬はれ、權兵衛伯が病氣でもないのに蒼白の顔して這々として居るのに、木堂氏は病氣を堪へて堂々と演壇に立つのはみんなこの理屈を證明して居るのだ、古歌に、

人の世の富は草葉におくつゆの

風をまつまの光なりけり

こあるのを味ふて置かねばならぬ、と、かう云つたからとて諸君にダイオゼニスや鴨長明の真似して樽の中や箱車の中に裸一貫の生活をせよと云ふのでない「衣食足りて禮節を知り倉廩満ちて榮辱を知る」と云ふから、衣食足り倉廩満つる必要はあるが、世の中には衣食足り倉廩満ちて居りながら、尙ほも物質的富にのみ目を注いで精神的富を省みないものがあるから、それを戒るのである

▲なす時の焰魔顔

「オオまあ嫌なことあんな恐い顔をして」と言ふのは待ちたまへ、恐い顔が何故いけない、成程「笑ふ門に福来る」と云ふから笑ひ顔もよからう、けれども人間と云ふものは笑ふてばかり居られるものでない、真面目な場所であつたら失禮になる「笑ひ事でないぞ」と叱られる、左様、物事を一心不乱に考へ真面目に語り全力を注いで行ふ時には決して笑ひを催はすものではない、必ず六ヶシイ恐い焰魔顔になるものだ、だから此諺は身でも口でも心でも働かして物事を成す時には恐い焰魔顔になる程真面目であれと云ふことだ「進め前方に」と云ふ書物に「總ての人となれ、總ての人となれと云ふは全力を盡す人となれと

云ふことなり、何如に容易き事柄と雖も決して隻手を以てなすべからず」と云つてある、百獸の王と云はるゝ獅子は小さい兎を捕へるのにも全力を注ぐと云ふではないか、あれほど強い獅子ですら、小敵を侮らずに全力を注げばこそ百獸の王たるの地位を辱かしないのである、「天下をば握るその手で草履どり」とやら、木下藤吉郎は草履取に全力を注いだればこそ、遂には六十餘州をも握り得たのだ、世の輕薄才子が動もするご「乃公は將來に一世の英傑を以て任じて居る、是しきの些事に拘はるべきでない」なごご、逆も捉み得られない天角の光明に見惚れて居る間に、足下の糞壺に陥る様な破目になることが往々あるのは、なす時に焰魔顔をしないからだ。

▲來年の事言へば鬼が笑ふ

手癖の悪い奴があつた、此奴困つた奴で毎日隣家の雞を盗んで仕方がない、ある道學先生がその不心得を諭して今日限り盗人職は廢業しろと云つたら、奴ぬからず「これまで毎日盗んだのものを、一時に止めては心淋しいから、本年中は一ヶ月に一回宛盗むことにして、來年からは斷然やめることにしましよ」と答へたといふ話がある、此の時鬼が笑つたか大蛇がくさめしたかは知らないが、諸君は此話をきいて恐らく笑ふであらう、しかし能く考へて見て下さい、決して笑も事ではないよ、人間の心には理性の方面と感情の方面とあつて、理性ではチャンと合點して居ても、感情が之を妨げて實行を鈍らすのだ、例へば

老人はいたわつて大切にすへきだと云ふことは常から承知して居ても、汽車の中などで、若い人達は花の乙女には席を譲つても、梅干婆さんには腰かけさして上げやうともしないやうなものだ、斯様に理性の方では能くわかつて雞を盗むのはいけないと知つても、今年中はせめて一ヶ月一回だけ盗みたいと云ふのが感情だ、佛敎では理性の迷執を見惑と名けて、その迷を破ることは石を破るやうに、堅いけれども一時に罅があく、感情の迷執を思惑と名けて、そいつは優しいけれども蓮の莖を折つて糸を取り去るやうに手間ざるものだといつてある、斯様なこみ入つた講義は兎も角として「人遠き慮なければ必ず近き憂あり」だから、さきの雁より手近の鳩と云つたやうな、近欲な今日主義も困るがそうかと云つて自己の身の周圍や一家の整理の出來ないものが遠い他所のこと

にあせつて見たり、今日現在の處置にも困つて居るものが遠き將來に大なる望みを屬して居たりするのは不可い、お浄土參りの旅費として本山に納める金を多額に持つて居る婆さんが、食ひ逃げしたと云ふ話があるでないか、「オイ、婆さん、鬼のお臍が宿替しますよ」但し一説によれば鬼が笑ふと云ふのは嘲り笑ふのではなくて、嬉しくて笑ふのである、來年のこと云ふとは手近の小さな名利を顧みず遠き將來の計を立つること、又は未來往生のてだてをするを云つたものだ、是等の遠き計畫は實に結好なことであるから、鬼ですらも感心し喜んで笑ふのだと云ふが、是れも御尤である。

▲馬の耳に風

何事でも博く識つて居ると云ふことはよいことで、窃盜することでも博奕やることでも知つて居るのは善いが、唯だそんな悪事は知つて居るだけに止めて行はなければ宜いのだ、見聞の博きを尙ぶと云ふことは何處までも眞理だと云ふ人もあるが、萬更左様な譯にもゆくまい、長屋の嬬さんども寄り集まつて井戸端會議を行つて居ると、見聞が博くなるのではあらうが確なことはない、人間と云ふのは困つた病氣があつて親のある間に癒しておけばよかつたであらうが、親のアダムやイブに既にその病氣があつたと云ふから仕方がない、好んで他人の悪口を言ふものである、井戸端會議で見聞を博くして居ると「これは内密ですから大きな聲では云はれない、外の人には話さないやうに」と云つたことが、遂にはその界限の大評判となり、隣同士の喧嘩となり、此方の嬬と彼

方の婆と睨み合ひとなり、家出となり、離縁沙汰となるのだ、だから大抵のこ
とは「馬の耳に風」と聞かぬに限る、昔支那に許山と云ふ偏屈爺があつて、何
一つも財産を持たずに所定めずうろついて居た、併し此爺なかなか賢い者であ
つたから、時の天子堯帝が位を譲つて天子にしてやらうと云つた所が、許山先
生大の不機嫌で、「どうも汚らしいことを聞いた」と早速川へ行つて耳を洗つ
て居た、その川尻にモ一人偏屈爺が牛を牽いて通りかゝつたが、「そんな汚れた
耳を洗つた水を乃公の牛に飲ませては牛が汚れるからと、云つて、牛に水を飲
まसानかつた」と云ふ話がある、斯程の偏屈爺でも困るが餘計に人の身の上のこと
を聞きながら話したがるのも大に困る、庚申さんの形像を見ると前に三匹の猿
が居る、一匹は妄りに見ぬために兩手で兩眼を掩ひ、一匹は妄りに聞かぬため

に兩手で兩耳を押さ、一匹は妄りに語らぬために兩手で口を塞いで居る、慈
鎮和尚の七猿の歌と云ふのがある、多分此の見ザル聞かザル言はザルの三猿を
詠じたものであらう、その歌は、

つく／＼と浮世の中を思ふには

まじらざるこそまさるなりけれ

見聞かでも言はでもかなはざるものを

浮世の中にまじる習ひは

つれもなくいとほざるこそうかりけれ

定めなき世をゆめと見るから

何事も見ればこそげにむつかしや

見ざるにまさることはあらしな
聞けばこそ望みも起れ腹も立て

きかざるぞげにまさるなりけり

心にはなにはの事を思ふとも

人のあしきを言はざるぞよき

不見不聞不言三つの猿よりも

思はざるこそまさるなりけり

極端なやうではあるが、味はうてみれば随分面白いではないか。

▲氏より育ち

釋迦如來の當時天竺には士族平民と云つたやうな族籍上の階級が大變きびしいものであつた、然るに釋迦如來は尊い王族の身を以て出家したのだから、各國の王宮に出入したり、婆羅門の學者輩を相手にするお身分であるにもかゝらず、佛法の中に族籍の別はないと仰せられて、他の人達がきらふのかまはずに、優波離と云ふ賤しい穢多の理髮師をお弟子にして育てた、その優波離が終には十大弟子の一人持律第一の尊者となられたのである。

また王舍城の北に舍利弗目犍連と云ふ二人の婆羅門學者があつて、二百五十人の門人を連れて居た、而して舍利弗と目犍連と二人の間に「二人の中何人でも先きに眞の道を開いたものが教へ知らすことにしやう」と云ふ約束をして居た、ある日釋迦如來の弟子阿説示が服裝態度は正しく、顔色には平和慰安の光

を浮べて、王舎城の内をしづしづと托鉢して居た、舍利弗が之を見て「貴殿は出家してまだ日は浅いらしいけれども、餘程安心ができて居るやうに見受けるが、お師匠さんは何處の何人ですか」と尋ねた、阿説示答へて「我が今の師は釋迦如來と云つて、一切種智を得てござる佛陀であります、我は年のゆかぬものですから、師の教法を充分にお取り次ぎすることはできませんが、大略は斯爾々諸法は縁より生るなり、そのいわれをば如來說く、そのもの縁により滅ぶ、これぞ佛のおしへなる」と、舍利弗は是れをきいて大に感心し、早速我が家に歸りて目犍連に此のことを話して聞かせ、二人共に釋迦如來の弟子になることに決定した、二百五十人の門人共は「先生が行くのならば我々も共に」と皆連れ立ちて釋迦如來の弟子となつた、後に舍利弗は智慧第一、目犍連は神通

第一の大阿羅漢となられて、十大弟子の内に數へられるやうになつた。

優波離は穢多の家に生れても、育ちがよかつたから持律第一の弟子となつた阿説示の育ちがよかつたから、二人の婆羅門學者及びその門人二百五十人まで釋迦如來の弟子となるに至つた、これが所謂氏より育ち。

▲井の蛙大海を知らず

「君子は義に論る小人は利に論る」と云つて、善人は物事の善い方のみを見、惡人は悪い方のみを見るものだ、佛さんから見ればこの五磔草木あり、山河大地ある粗末な世界が、七寶莊嚴の淨土に見ねると云ふことだ、ある二人の兒童に俗を見せた所が甲の兒童は「これは和かくて甘いから、お祖母さんにあげた

ら大層喜ばれるだらう』と云ひ、乙の兒童は『この餡はねばり氣があつてひつつきやすいから、これを糸に括りつけて錢箱の中に吊り下げたら、箱の中の錢を吊り出して取れるだらう』と云つたと云ふ話がある、孝行な兒童と盗人根性さうぼうこんせうの兒童とはこの位目のつけ方がちがう、随つて善人には萬物皆善に見え、悪人には悪に見え、學者には萬物が學問の材料に見え、商人には皆商品として見ゆるものだ、そこで井の蛙大海を知らずと云ふのも解釋が出来てあらう、井とは何だ、井は清涼純潔なものである、大海は汚物や何かい流れ込むから混濁不潔なものである、清涼純潔な井の中で清涼純潔なものばかりたべて育つた蛙は清涼純潔であるに相違ない、だから混濁不潔なものを知らないのだ、人間もその通りで石部金吉には何處の遊廓あそびがらに別嬪べっぴんが居るやら、何家の娘の縹緞ひょうとく

が好いやら少しも知れない、新聞の殺人事件や強盜事件を精しく讀んでその噂を爲合つたり、近所のお臺所の内幕を知つて居てべちや／＼言ひ觸らしたりなにかする人が立派であるか、或は其節から表彰せられた美事善行びじぜんかうを聞き、多大な資財を公益事業のために寄附したと云ふやうなことを讀んで喜ぶ人の方が立派であらうか、讀者諸君は孰れなりと随意に擇み給へ、拙者は餡を盗人の道具と云はずに老人を喜ばす道具だと云ひ、新聞は世の中の美事善行を報道するものだと見、世間には清淨親切な人が多いものだと考へるやうにしたいと思ふ。

▲のみと云へば槌

ノミと云ふものには嫌なやつが多い、第一蚤は夏の夜寢席の間に横行跳梁し

て、晝間の勞働に疲れて夜分だけなりと安き休息を得たいと思ふて居る貧乏人をいぢめる、その癖彼の短見淺慮なる、頭かくして尻かくさず、容易に命を失ふを知らない、次に暴酒漢となるは是れまた妻子を飢と寒さに泣かしめ、時には警察のお役人に面倒をかけ遂には自己の精神上と肉體上とに健康を損ひ不治の病氣を醸すに至るではないか、テニヲハの『唯……あるのみ』『……するのみ』と云ふ時ののみは唯だそれと限つた辭であるから、行き詰まつた餘裕のない、如何にも窮屈な意味である成程蚤や暴酒漢やテニヲハのみは不可いがない、今此處で云ふ大工の必要道具で、新參大工唯一のお相手たる鑿が何故不可いかさあゝその理由を云はう、鑿は穴をあけるのが本職で、槌は穴を塞ぐのが役目である、槌は鑿を助けて穴をあけることもあるけれど、實は疵穴を塞ぐため

に埋木をしたり、隙のあいてる所に栓を打ち込んだり、すべて穴を塞ぎ缺點を補ふ役目を持つて居る、乃ち『鑿と云へば槌』と云ふのは『缺點あらば之を補ふことを心掛けよ』と云ふことだ『過まつては改むるに憚ること勿れ』と云ふのと略同じことと思つて居ればよい、店の白鼠が帳尻を噛つて後始末に困るのは鑿だけありて、槌がないからだ、鑿と同時に槌を考へて置けば決して後始末に困るやうなことを仕出來す筈はない、『入るを計つて出づるを制する』と云ふことは、節季に鬼に攻められない良手段じやそうな、斯様な金錢問題は且らく措き、吾々の精神上に穴があいた時に之を塞ぐ工夫するのは、一層肝要なことではあるまいか、吾々は毎日罪惡と云ふ鑿を以て、苦痛と云ふ穴をあけて居りはすまいか、若し穴をあけて居るとすれば懺悔と云ふ栓を宗教と云ふ槌で叩き

込んで慰安と云ふ立派な木材となし何處へ使つても恥かしくないやうに仕上げなければならぬ、ナニ槌が鑿を助けて穴をあけることがあるやうに、宗教が罪悪を助けて苦痛を招くことがあるかと問ふのだなソリヤアあることもあるとも、一一具體的説明はしないが、宗教のある弊害の方面を捉へてそれを眞の宗教だと思ふやうな迷信に陥ると、茲に罪悪も造り苦痛も伴ふ、しかし槌は鑿を助けるばかりでない如く、宗教は全部迷信で有害なものだと云ふのは大なる誤である、何は兎もあれ、『鑿と云へば槌』穴があくと知つたら必ず之を塞ぐことを心掛けるやうにしようではないか。

▲鬼も十八蛇も二十

鬼や蛇のやうな恐ろしい醜いものでもそれ／＼の程があるもので、人間も十八や二十が美しい盛りであるやうに、鬼や蛇でも十八や二十位の年齢では随分美しいものであると云ふ解釋をする者もあるが、是れは以ての外の誤であるとも云へないけれど、鳥の舎は別の解釋をして見やうと思ふ。十八とか二十とか云ふのは年齢ではなくて十八とは木と云ふ字を分けたので木のことだ、廿と云ふのは艸構に書く艸と云ふ字だから廿は草だ、そこで鬼も十八蛇も廿といふのは鬼でも木には困るし、蛇でも草には困るといふことだ、是れだけでは何のことだかまだわかるまい、鬼が木に困ると云ふのは、節分の夜に鬼が來るから鬼の目突きだと云つて、各家に門口に柊をさすだらう、いかな鬼でも此の柊には困るのだ、だから鬼も木には困るといふのだ、蛇が草に困ると云ふのは何故かと

いふと、諺に『蛇の道はへびだよすぐ知れる』といふことがあるだらう、蛇が
 どれほど隠れて居らうと思ふても、自分の通つた處は草が倒れてズツト道がつ
 いて居るものだから、直に知られる、そこで草がなかつたら巧く隠れることが
 出来るのに、草には實に困るのである、これで一往の解釋はしたが、モ少し
 説明しなければならぬ、鬼とは佛教で二様の意味に用ひられて居る、一には鬼
 杯といふときには餓鬼を指して鬼といふたので、喉は細く食物はなくて飢渴
 に苦んで居るやつだ、二には羅刹又は夜叉を鬼といふて居る、羅刹は破壊者と
 云ふ意味で夜叉は捷疾鬼といふ意味である、是等は十界の中には餓鬼道に屬す
 るものではあるが、素晴らしい勢力のある類で、節分の夜に来る鬼も普通の餓
 鬼ではなくて此の羅刹又は夜叉の方である、而してこの鬼はよく功德を破壊し

又は迅速に飛び來りて人を害すると云ふ性質のものだから、鬼といふのは瞋恚
 即ち憤怒の表象である、瞋恚が肉體や精神や資産や徳義を破壊すること鬼の如
 くだから鬼は瞋恚の表象だ、蛇はよくまきついて離さない、又一度口にくはへ
 たらたごい口が裂けても吞まねばきかぬといふ性質だから貪慾の表象だ、而し
 て衆牛が生死に迷ふて居るのは貪瞋癡の三毒に由るのであるが、貪と瞋とは癡
 から起るので、貪と瞋とは全く癡であるから衆生が迷ふて居るのは貪と瞋とに
 よるといふてもよい、これは衆生を苦める貪瞋の煩惱でも、それぞれの相手
 に出遇へば、恰も鬼が木に困り蛇が草に困るやうに、直にへこたれてしまふ、
 通常小乗教では貪慾を退治するには不淨觀を用ひ、瞋恚を退治するには慈悲
 觀を以てすると云ふことになつて居るが、左様な不淨觀だ慈悲觀だと云ふ六ヶ

しいことは別問題として、要するに貪慾や瞋恚を退治するには宗教上の信念が最も有効であると云ふことになる、それはまた何故かと云ふに、釋迦如來が悟を開かれるのについても、岩の上や砂の磧でなくして、菩提樹の下に吉祥草を敷いて座つて居られたと云ふではないか、釋迦如來が悟を開いたといふことは矢張宗教的の信念を以て貪瞋の煩惱を退治せられたことだ、この宗教的の信念を表象する所の菩提樹と吉祥草とは貪瞋煩惱の蛇と鬼とを退治する有効なものであつたのだ、我々は凡夫だから我々の心には時々鬼や蛇やが出て来て困るによつて、この鬼と蛇とを對治する木と草とを植わつて、繁らせて、用意して置くのがよからう。

▲臭いものに蠅がたかる

如何云ふものか人の鼻の感覺の中で不快なものを臭いと云ひ、快ひ方を香しいと云つて區別してある様だが、臭いも香しいも共に鼻の感覺であること云ふことは一つごとである、蠅は汚い蟲であるが矢張り動物である、動物である點は蠅も蛆虫も鶴も龜も猫も杓子も（オット杓子はちがふが）平民も貴族も同じものである。

左様なことはどちらでもよいが、臭いものに蠅がたかるのならば、香しいものには何がたかるのだらうか。

現今では日本から英國へ全權大使が行くにしても前以て電報で通知せられて

居るから、先方へ到着せぬ前から先方で接待の準備して居ると云ふやうなありさまだけれども、千年の昔には電報も蒸氣船もなかつたから、外國へ使節として行くのは随分難儀なことであつた、延暦二十三年に我國から支那へ行つた大使は、弘法大師和讃に『遂にすなはち延暦の、末の年なる五月より、藤原姓の賀能等と、震且船に乗りを得て』とある藤原の賀能本名は葛野鷹と云ふ人であつたが、豫め電報で通知して置かなかつたものだから、福州の港についたけれども、福州の知事が日本の特命全權大使であると云ふことを信じないで、上陸することすら許してくれない、藤原大使は手紙を以て事情を述べて、色々願ふたけれども知事がとりあはない、そこで藤原大使は便乗して居られた所の弘法大師に頼んで、手紙の代作をして貰ふた、その時弘法大師がお作りになつた

手紙に『臭いものに蠅がたかる、支那は汚い臭い國だから我々蠅の様なものが集まつて来たのだ』などと云ふ亂暴なことは云はないで『山は黙つて居るけれども大きい山になると鳥や獸が多と集まつて来る、水は言はないけれども深い水になると魚や龜が夥しく寄つて来る、太平に良き政治の行き届いた王様が居れば、險阻な地方からは山や溪に梯子かけてでも都へ貢物を持って来るし、海川の隔つた、地方の土民は船や筏に乗つてまでも王様の御機嫌伺ひに来るものだ、是れと云ふのも左様な立派な王様が居ればその領内が泰平無事に治まるばかりでなく、域外の隣國までが風雨順時五穀豊熟とよく治まるからである、我が日本國がよく治まつて居るのも全く支那の皇帝の徳によるものだらうと云ふので、態々御土産物を差上げたいと思ふて特命大使として来たのである云云』と

長い手紙を書いて知事に送つた所が、福州の知事は此手紙を見て感心して、斯程の立派な手紙を作る者は海賊や漁夫ではない、慥に日本の大使だ、それとも知らずにこれまで失禮をして居たものだと、早速上陸を許して都の方へ御送り申すことにしたのである、若し此時に弘法大師が臭いものに蠅がたかるでなしに、香しい帝王の所へは四方の國から徳を慕ふて集まつて來ると云ふ、お世辭たつぶりの手紙を代作しなかつたならば、藤原大使は大切な使命を果さずに、何日まで船の中で呻吟して居なければならなかつたかも知れぬ、或は明治になつて電報と云ふことが流行つて來るまで、一千七十年程の間、福州の港に船の中で蹲踞で居たかも知れぬ。

▲やみ夜に鐵砲

暗夜に鐵砲を放つにしたところが、何をねらうて撃つてよいのか、さつぱり目標がない、馬鹿らしい、暗夜に鐵砲撃つのは止めやうか、サア止め給へ止めるが好い、と云つても誰れも止めそうにない、暗夜に鐵砲撃つのは好い加減に止めたらよかりそうなものを。

今事務室で一生懸命に汗水たらして働いて居る同僚に向つて『如何だ苦しいか』とさうと、『ア、苦しい』と云ふ、『苦しければ働くのを止めたらよからう』と云へば『月給貰ふて居る以上は働かねばならぬ』と云ふ『月給貰ふのを止めたらどうだ』と云へば『それでは食へない』と云ふ『食はずに居ればよいじや

ないか』と云へば『それでは死ぬ』『死んでも關はないじやないか』『左様な
 亂暴なことがあるものか、生きて来た世界じやないか』『生きて居て何にする
 何のために生きて居る』『何のために生きて居るのか知らない、死ぬのは嫌だ
 よ』一發の鐵砲に目標のない位のことは何のその、萬物の靈長たる尊い人間様
 が大切なる五十年の一生を送るのに、大抵はこの『何のために生きて居るの
 か知らない、死ぬのはいやだよ』位の所とは餘り勿體ないではないか、是れが
 所謂醉生夢死と云ふのだらう、弘法大師はこのありさまを『生れ生れ生れ生れ
 て生の始めに暗く、死に死に死に死んで死の終りに冥し』とも、又は『生れ之
 き生れ之いて六趣に輪轉し、死に去り死に去りて三途に沈淪す、我を生する父
 母も生の由つて來ることを知らず、死を受くる我身が死の去る所を悟らず』と

仰せられてある、このありさまを暗夜に鐵砲と云はすして何と云はう、何とか
 して暗夜に鐵砲の狂態を早く止めることにしたいものじやがなあ。

▲まかぬ種は生へぬ

まかぬ種は生へぬ、それ／＼それでよいのだ、大根種でも黍種でもまだまか
 ずに藏の中や簞笥の抽斗の中なんかに入れてある時に芽が出て生へたらどうで
 あらう、それこそ大變だ、こんど蒔いた時に役にたかない、それが嘘だと思ふ
 ならば農人にきいてごらん、黍種を蒔く前に水に種を浸してある時に、芽が出
 ることがあるが、それすらいけないと云ふことだ、だから蒔かないで貯へて
 ある種は生へないのが宜しいのだ、所がまかぬ前から生へて困るものが黍種よ

りも外にあるそうだが、それは何であらう、元來人間は第一自己の生命を継ぎ、一家を維持して行くために、相當の職を覺へてをき、その職で一家を維持して行けるやうになつてから家を持つ、家を持つた上で妻を迎へる、妻を迎へた上で子を擧げる、これが通常の順序だ、然るに何も職を知らないで親の脛かちりが一家を持たうとする、家を持つて居ないものが妻をほしがらる、モーツヒゴいのは、妻もない前から子をこさへるものさねあるので困る。日だれだ其處で其様に笑ふのは、靜にしたまへ。と云ふやうなことを、鳩翁道話か何かで見たりやうに思ふ、慈雲尊者の言に『天地あれば陰陽あり男女あり、男女あればその情欲あり、この人情あるもの道を傳ふる器なり、漸次に道を全くせば賢聖の地位にも入るべし、一切男子皆妻あるべく一切女人悉く夫あるべし、この夫妻あ

れば夫妻の道あり、夫妻ありて父子あり父子ありて兄弟あり、男女の會遇宿縁定まりて來て現縁成就するは人倫の常なり、もし父母親族のゆるさぬもの、又は他家に屬せる者等には心をよすまじきなり、もし六親の中に不淨行をなすは禽獸の行なり、よく不邪嫉戒を守るものは禮度内に定まつて德澤外に溢る、神の守護あり、妻妾妬忌なく、孝子順孫の風長く傳はり、親族和し、國政亂れず天下平かなり、乃至欲にありて清淨なるは觀音菩薩の三摩地門なり」と云はれてある、一口に云へば男女の間の道を外れると禽獸の行とも云はれるが、正しくその道を守れば觀音菩薩の思召にかなふと云ふのだ、それだから蒔かぬ前から種の生へないやうに、妻のない前から子をこさへないやうにすべきである。

▲下駄にやき味噌

ある所に拔作と云ふ馬鹿の阿呆の白痴があつて下駄に味噌をつけてやき味噌をこしらへて居りました、拔作のお母さんが「何故そんな汚いことをするので」と叱りました、拔作は「下駄に味噌がついて居るのが汚なければあとで下駄を洗ふて置けばよいでせう」と申しました、お母さんは「味噌かきたないのではない、下駄がきたないよ、汚い下駄につけた味噌がたべられるものですか」とおこりつけました、拔作は「何故下駄が汚いのだらう」と云ふやうな顔をして居りました。

拔作とお母さんどちらが賢いだらう、下駄に味噌でも何でもついて居てそ

れを知らずにふみつけたら「おゝきたな」と云ふであらう、他人の足に唾や痰やを吐きかけたら足の持主は汚いと云ふて怒るであらう、それならば口の中が足よりも汚いのかと云ふと、口の中に足をつき込んだら口の持主は汚いと云ふて怒る、だから口の中と足どちらが汚いのかわからない、従つて下駄と味噌どちらが汚いのかわからないことになる、尤もどちらが汚いのかわからないのは足と口中、下駄と味噌とに限つたことではない、人格と容貌と何れが尊く何れが汚いものであると云ふこともわからないではないか、何人でも人格の方が大切だと云ふであらうけれど、一生涯苦樂を共にすべき結婚の相談の最初に容色が如何だと云ふではないか、ある人は美人才子と云ふて女は美しいと云ふことで價値をさだめ、男子は才氣で價値を定めるのだと云ふが、全く左様と

も云はれない、ある所に媒人の口車にかゝつて見會もせず、婚姻をして見ると花嫁がおたふくほどの美人ではなくて、まるで山姥のやうな醜女であつたから新郎はびつくりして三行半にも及ばず、「一目見て二目見られぬ三めかたち、四めにせよとは五めん候らへ」とやつた、新嫁もさるもの直に「みめよきは夫のためにふためなり、ひとめなどにはかまはざりけり」と返したので、めでたく三三九度ができたと云ふ、して見ると女子だからとて容色ばかりがとりわてはないと見ゆる、予輩の知らない山姥面の一醜女が「心だに正しかりせばほむべきに、われをあざける人そをかしき」と悔んだことがある、誠にお氣の毒さん美人才子と云ふのや縁談に容色を問ふことやが眞理であるか、又は「みめよきは」の歌や「心だに正しかりせば」の歌やが眞理であるかが定まらないうちは

拔作とお母さんどごちらが賢いのかわからないであらう、それは兎も角昭憲皇太后の御歌に

白妙の衣のちりはゝらへごも

うきは心のけがれなりけり

と仰せられてあり、また古人も

姿こそみ山かくれの朽木なれ

こゝろは花になさばなりなむ

と云ふてあるのを味ふてもらひたい。

▲福は内鬼は外

福は内鬼は外と云ふ命題は善か悪かと云ふに、悪と云ふ解釋と善と云ふ解釋とあると思ふ、一寸斷はつてをくが今は「福は内へ鬼は外へ」と云ふ意味でなしに「内は福にして外は鬼なり」と云ふ意味で解釋をする、福は内へ鬼は外へと云ふことは言を換へて云へば、「我家にはよきことが来るやうに、悪いことは他所に行つてしまふやうに、他人は如何あらうとも我のみはよかれ」と云ふ意味であるから善いことゝは云はれない、内は福にして外は鬼なりと云ふ意味の命題で悪いと云ふのは、一家の内では相當の資産もあり、可なり贅澤な生活をして居るものが、外のものに對しては随分きつい、借家人や小作人に對してもあはれみがなく、公共事業や何かの寄附だとか義捐だとか云ふことにはしみつたれなのが、内は福にして外は鬼なりと云ふ分に當り、これは悪い方である、

善い方の意味は如何かと云ふと、内と云ふのは心の内で外と云ふのは身の行爲である、福とは何かと云ふと、觀無量量經に世戒行の三福と云ふことが説かれてある、世福と云ふのは父母に孝行したり、師長を敬ふたり、殺生をせず、十善業を行ふ杯である、戒福と云ふのは佛教の戒律をよく守つて行儀を亂さないことである、行福と云ふのは吾提心を起し、佛法の正道理を信じ、他人にも勧める杯である、一口に云へば福とは道德のことである、斯様な福が心の内にあつて、身の行爲は鬼の様なのがよい、道德心があつて鬼の様な行爲をすればよいと云ふのは、如何にもヘンテコに聞こえるであらうが、こゝで鬼と云ふのは鬼權のやうな鬼ではなくて、徳川家光を守りたてゝ名將軍とならしめた鬼作左の如きを云ふのだ、臣としてよく君を諫めるのは鬼家臣である、舍監として

よく生徒を取締れば鬼舎監である、官吏としてよく請負業者の贈賄を斥けたら鬼官吏である、加藤清正は鬼將軍であつた、雲照和尚は鬼律師であつた、心の内に福のあるものでなければ斯かる鬼の行爲は爲し得ない、諸君福は内鬼は外の意味がなるほどわかりましたか、わかつた御方は手を舉げないでもよろしいから、來年の節分からと云はずに今日只今から福は内鬼は外と豆ではない忠實の準備にとりかゝつて下さい。

▲これにこりよ

淨土宗や眞宗で大切にしている觀無量壽經の中に、頻婆沙羅王はその太子阿闍世のために牢に入れられ、王后の韋提希も座敷牢に閉ぢこめられて苦勞し

て居た、その時に釋迦如來が韋提希の前に現はれておいでになつた、韋提希は「妾は何の因果で斯様な親不孝な子をもつたのでせう、また如來さまは何故に提婆達多のやうなわる者と從兄弟に生れあはせたのでせう、こんなつらい浮世はいやになりましたから、どうぞおろそかにお淨土へ參つてだてを教へて下さい」と、釋迦如來に御願ひした、そこで釋迦如來は觀無量壽經をお説きになり韋提希に限らずこの世界には殺人、盜賊、天災、地變の多いことであるから是に懲りよ、是に懲々して阿彌陀さまのお淨土にまいるやうに心がけよ、と仰せられた、是れが「これにこりよ」と云ふ意味らしくもあるが、左様でないかも知れぬ、それは「これにこりよ」と云ひ始めた翁に聞くより外に途はないが、その翁は何處に居るやらわからないから仕方がない、烏の舎曰くじや、是に是

よと云ふのは茶碗には茶柄杓、開いた口にはぼた餅、あれにはあれ、これにはこれと云ふようによく物が相應することだ、この相應すると云ふことは至つて結構なことで、相應によつて佛さまにでもなられるのである、嘘だと思ふならば弘法大師さまにお尋ねしてごらん、『三密相應して加持するが故に早く佛果の成就を得』と仰せられてある、三密とは何だ、身の行ひと口の語と心の想ひとを三密と云ふのだ、世の中には薄志弱行で大言壯語する者、心ではけなして頭ばかり下ける者、口でくさして心で惚れてる者などあるが、是等は皆相應して居ないのだ、三密相應して加持すると云ふのはこれとちがつて、身と口と心との三がピタと一致して、古歌に所謂

口に誦じ心に念ひ身に修して

法の道にぞ入相のかね

と云ふやうになり、佛さんの身と口と心とのやうになることだ、かう云ふたからとて身に金箔をつけて、金碗の飯を一杯で辛抱すると云ふのではない、それでは如何すればよいのかと云ふに、佛さまの思召は生佛不二である、生佛不二とは衆生も佛もわからないと云ふことだ、生佛不二だから自他平等である、佛さまの慈悲と云ふものもこゝから出て居るのだ、我々が他人の子を見ること我子の如く、他の苦を憐むことおのが身に於けるが如くと云ふやうになり、而してこの心がけで身と口とを働かせて行くやうになれば餘程佛さまに近いものだ、斯くの如くその心を以てすれば、一切の所作皆佛さまの思召にかなふと云ふのが、當相即道即事而眞の法門であつて、三密相應と云ふのもこゝのことである

若しお浄土参りは念佛に限る、佛さまになるのはお題目にかぎると云ふて居たら甚だ困る者がある、當相即道即事而真、何をして居ても成佛だ、況して生佛不二の大悲の本誓をよろこび、金口の眞説たる生佛不二の眞言を唱へ、生佛不二の合掌をなして禮拜するに於ては、生佛不二の覺りを開くこと何の疑ふべきでない、讀者諸君の中には疑ふお方があるか知らないが鳥の舎は確と信じて疑はないのである、是に是よ、實に結構な教であると思ふ。

▲縁ご月日

縁ご云ふのは機 會 である、月日と云ふのは時日である、この縁ご月日とは至つて肝要なものであることは誰も知つて居るが、それに就て明忍律師の事蹟を紹介しやう。

蹟を紹介しやう。

明忍律師は天正四年に京都でうまれた、幼い時から大層惻愍な方で内外の學問に通じて居た、十一歳の春冠して少内記に任せられ、十六歳で少外記右少史の職に補せられ、官吏の間で評判者となつて居たが、浮世の榮華の頼むに足らないことを悟りて、高雄山の晋海僧正の許に佛法を學び、廿一歳でいよく出家得度し、寢食を忘れて眞言秘密の法を修行して居た、當時戒律の法がいたく衰へて居たからそれを嘆き、之を盛にして古聖の蹤に倣はんものと、師の晋海僧正にいとまを乞ふて大和へ遊歴した、時に同じこころざしで遊歴して居る慧雲と云ふ人と邂逅し、連れ立つて戒律中興の大徳興正菩薩の舊跡西大寺に参つた、徳の感ずる所か時勢の然らしむる所か、西大寺に友尊と云ふ人があつて

明忍慧雲二師の篤志を感じて、三人力を協せて戒律の法を興すことになり、戒律に關する書物を古い寺で捜し出して研究したり、或は寺を建て、戒壇を築いたりなどして、戒律の法大に光を増した律師は此時まだ三十一であつたが是から海外に行て更に深く研究して來んものと、後のことは友尊惠雲の二師に頼んでおいて、支那行の途についた、九州に行き平戸から對馬まで渡つたが、國家の法度で外國行を禁せられて居たからして、望の果たすことができない、支那に行けなければせめて朝鮮までなりと行きたいと思ふて居たが、朝鮮の釜山は沖の彼方に見えて居る對馬にありながら、希望は叶はない、それでも律師は機を待つて居た、その當まず氣候の悪い對馬に留りて、機會もあらばと時の至るを待つて居た、その當時國元の友尊惠雲二師から手紙を以て『到底も支那に行かれそうにないのだから、邊鄙に留まつて居るよりは早く歸つたがよからう、約束の三ヶ年の月日も既に経つたではないか』と申し越した、律師のその返事に『前に三ヶ年と云ふたのは、暇をもらふて留守を頼むための口實であつた、予の希望は三ヶ年の三の下に十の字を加へて心得て貰ひたい』と、何と大きな希望ではないか、その後支那や朝鮮には佛法衰へて居て、到底留學に行く價值はないと知つたけれどもまだ何か思ふ所があつたのであらう、對馬に留まつて居たが、惜いことには病に冒され遠大の希望を抱いた儘、對馬の土地で入寂してしまつた、それが慶長十五年六月七日で僅に三十五歳と云ふ短命であつた、律師は實に縁と月日とがなかつたために、遠大の希望を懷いたまゝ、淋しい邊鄙の土となつてしまつたのだ、徳川時代劈頭の英僧明忍律師に機會と時間がなかつたのは實に惜む

ら、邊鄙に留まつて居るよりは早く歸つたがよからう、約束の三ヶ年の月日も既に経つたではないか』と申し越した、律師のその返事に『前に三ヶ年と云ふたのは、暇をもらふて留守を頼むための口實であつた、予の希望は三ヶ年の三の下に十の字を加へて心得て貰ひたい』と、何と大きな希望ではないか、その後支那や朝鮮には佛法衰へて居て、到底留學に行く價值はないと知つたけれどもまだ何か思ふ所があつたのであらう、對馬に留まつて居たが、惜いことには病に冒され遠大の希望を抱いた儘、對馬の土地で入寂してしまつた、それが慶長十五年六月七日で僅に三十五歳と云ふ短命であつた、律師は實に縁と月日とがなかつたために、遠大の希望を懷いたまゝ、淋しい邊鄙の土となつてしまつたのだ、徳川時代劈頭の英僧明忍律師に機會と時間がなかつたのは實に惜む

べきではないか。

▲寺から里へ

慾張ると云ふ譯ではないが、通常里から寺へ財施を持つて行く、里から寺へ法施を頼んで行くものときまつて居るから、寺から里へ財施を持つて行つたり寺から里へ法施を頼んで行つたりするのは、どうも反對のやうな感じがする、寺から里へ出て還俗するとなると尙更その感じが深い、弘法大師も還俗の人を御覽になつて異様に御感じ遊ばしたものと見わた『むかしは頭を剃り今は髪を長くす、出家二種の心惟れ重なれり』等と詠せられた、そこで『寺から里へ』と云ふと直に物事の反對と云ふことを想ひ出すから、何か反對事の話をしやう

と思ふて、座の邊を搜して見て、手に觸れた一冊の書物の中のことを次の通り書つけた。昔高野山に長泉房忠義僧都と云ふ敏才のお方があつた、この長泉房が明神の祠に御參詣して居ると一人の旅僧が来て、大般若經の函に腰かけて平氣の平左で休んで居るから、長泉房が『貴僧の腰かけて居るのは大般若經ではないか』と云ふと、旅僧は『大般若の上に大般若をおくのに何の差支があるか』と答へて動かない、そこで長泉房は御免とも何とも云はずに、旅僧の頭の上に腰かけた、旅僧は苦しがつて押しつけようとするのを、長泉房は知らぬ顔の半兵衛で『大般若の上に大般若をおき、そのまた上に大般若をおくのに何も不都合はないじやないか』とやつたので、旅僧大に閉口した、この旅僧は誰あらう何處へ行つても理屈をこねて負けたことのないあの名高い一休和尚であつた。

何事にも豫め將來のことを考へて、そのことを處置するやうにしなければならぬ、若し輕卒に行動する時は行きつまつて後に狼狽しなければならぬ、殊に一家の戸主として家族を扶養せなければならぬ責任のある者は、必ず後日の事を慮つて事を取扱ひ、收支を定めて家計を豊かにするやうに心掛けなければならぬ、事に臨んで急にあわて出すのは誠に見つともなさの至極である、けれども斯様に他人のことを見つともないとか何とか云つて居ると、見つともなければ目をふさいで居れと云はれたら、目ばかりか口までふさがる譯だから、方面をかへて葦下鳥立つとしたら如何であらう、葦下鳥立つ、それは西行法師の

心なき身にもあはれは知られけり

しぎ立つ澤の秋の夕暮

と云ふ歌を想ひ出して如何にも淋しいあはれつばい感じが起る、現代の様に生存競争の烈しくて、少しも油断すれば世の中から取り残されて、追ひつくことのできない、他人の頭を踏臺にしても自己の立脚地を作り、他人の肉をむしりても自己の精力を補はねばならぬ様な世の中に、自己一身の維持にも棒を折つて、生きながら此世を捨て、しまふ様なことは、大正の青年の見習ふべきでない、むしろ

向上の道に進めどあげひばり

かげ見ぬまで高くとぶなり

とでも云ふ考へを持たねばならぬ、足下鳥たつ様に狼狽するのもしけないが、葦下鳥たつ様な陰氣なものもきらひだ。

▲竿のさきに鈴

鈴と云ふのはガラン／＼と鳴るものである、その鈴を高い竿のさきにつるしたら、その音が一層遠くまでよくきこわることであらう、ガラン／＼と鳴る鈴を態々高竿のさきにつるして一層よくきこわる様にするのは何の意味かと云ふと、これは名聲評判が遠くまできこわんことを欲する意味である、名聲が遠方まで知られると云ふことは誠に望ましいことである、だから阿彌陀さまがまだ法藏菩薩であらせられたときに四十八の誓願をお立てになつたが、その第十七の願に『若し我れが佛となりた時に十方世界の無量の諸佛が悉くわが名をほめたへて一切衆生に知らす様にして呉れなかつたならば佛とは云はれまい』と

ある、然し早合點して『名聲評判が遠くまで知られる、それは何でもないこと海軍の御用商人になつて公密錢でもつかふたら日本全國に評判せられる』杯と考へたり『足利尊氏吉良上野杯今に噂せられる結構なことだらう』なんて思ふものがあつたら、こんでもない大誤である、竿のさきに鈴だから竿に注意しなければならぬ、竿は元來眞直な性質のものである、だからたゞ噂が高いと云ふだけではなく直い上の噂でなくてはいけない、悪逆や泥棒や奸佞の噂が廣く遠く行き亘つたと云ふことは決して望ましいことでも尊いことでもない、阿彌陀さまがその名を十方世界の無量の諸佛がもてはやして、一切衆生に知らせるやうにと希望せられたのも、決して善くても悪くても廣く噂にのぼればそれでよいと云ふやうな意味でない、自分の南無阿彌陀佛と云ふ名號で衆生を救ふ

ことができる、その名號を諸佛がもてはやして衆生に知らせて呉れ、ば多くの衆生を救ふことができるからと云ふ意義である、何のことはない諸佛を廣告屋につかふて自己の衆生濟度法を普及させようと云ふのである、諸佛に局つたことはない、青二歳の小僧が一座の説教して、いもやはり救濟法の廣告になるのだ斯くの如く自己の名聲評判によつて少くとも世の光明となり、世人の道徳の模範となり、或は何等か世人に喜ばれると云ふことがなければ、名聲の遠く知られんことを望んで何にもならない、だから眞直な竿のさきに鈴をつるす必要がある、然るに普通の人は鈴を宙に投げ上げたり、曲つた樹の梢に引つけて鳴らすのみで、即ち直い土臺に置かないから、その名聲は高いと云ふだけで少しどうかすると直ちに落ちてしまふのである、諸君決して竿を忘れたまふな。

▲義理とふんどし

三世相と云ふ昔の書物には「常にふんどしを嫌ふ人はよろづにしまりなく生涯家を保ち難し」なんてかいてある、斯様なことは今日科學的に實證できるかどうか、若し事實とすれば現今の様にふんどしが減つてサルマタ全盛の時代の人にはよろづしまりがいかと云ふにまんざら其様でもないらしい、けれども何か一奮發するときの言ひ草にふんどしを緊めてかゝると云ふことがあるから三世相の説もまんざら無根のことでもあるまい、それはさうとふんどしを義理と對照して「義理とふんどし」と云ふたのが面白いではないか、ふんどしが窮屈で自憎落な人の好まぬ如く、義理も随分窮屈なものである、扇屋が教盛の代り

に自分の娘の首を切つて熊谷の前に出したのもやはり義理のためであつて、この義理のために泣いたものは古來幾程あるか到底計へ盡せない、また現代がふんどしの時代でなくサルマタの時代になつた如く、義理と云ふことは過去に去つて現代は自由の時代となつたらしい、斯の如く義理が流行らなくなつて自由思想の盛なること、恰もふんどしが減つてサルマタの流行ること同じ様な現象であるが、一大奮發する時には緊禪一番と云ふが如くに、一種偉大なる人物は決して義理節操を捨てるやうなことをしない。今日世間の通用語として紳士と云ふ語がある、この紳士と云ふ語も至つてお安く、一寸フロックコートでも着て居るか或は仙臺平の袴に羽二重の三紋付位を着て居れば、直に紳士のやうに云ふけれど、紳士と云ふのはそんなに服装によつて名くべきものではない、尤

も語の由來から云へば紳は大帶であつて、支那の服制ではこの紳を帶するのは上流の階級の人に局つて居たのだから、服装を標準にして紳士と云ふのも差支はないやうなもの、紳士の内容は人格の高潔なる人道義上圓滿なる人を意味して居るのだ、而してこの紳即ち大帶とは日本で云へば束帶のやうなものであらうが、大帶と云へば何だかふんどしを聯想したいやうな氣がする、何は兎もあれ大帶と人格道義ふんどしと、義理節操、何だか意義の共通な點があるやうにも思へる。

幽靈の濱風

達磨さんは足がないと云ふが、しかし達磨さんは天竺から支那まで来て、面

壁九年石の上に三年の禪宗を弘めた位だから、足がないと云ふ道理はなからうが、幽霊は腰から下がふわ／＼だと云ふから、勿論足はなからう、足がない、お錢がないから贅澤なたのしみはできぬであらう、そうだ、たのしみがないからうらめしや柳の下へ出て来るのであらう、その幽霊君が柳の下でなくて濱風の夕涼みとは洒落て居るではないか、それは兎も角として、稻一本も作つて居ない雀ですら、毎日樂しそくに暮らして居るではないか、胴着一枚の着替もない狗の子ですら雪の中を楽しくねころんであそぶではないか、如何に貧乏とは云へ、人間様に樂み慰みがなくてはなるものか、それにしても人間世界は不便なことには金錢と云ふことがある、樂み慰みを得んとせば金錢でもつてこれを買はねばならぬ、錢で買はないで樂しい善いものがあつたら、鳥の舎と仲間の貧

乏人ども大にたすかる譯だ、それに就て何もこゝで經濟論をやるでもないが、物は高價なものが立派なものではあらうが、しかし價の高いものでつまらないものもある、またそれと同時に價の安いのも必ずしもつまらぬものとはかぎらない、昔の人も『花鳥風月は定まれる主なければ、ほしいまゝに之を取り用ふれどもとがむる者なく、また金錢を要せず、また之を如何に用ふるともつかひへらすことなし』と云つて、清廉潔白の仙人杯はみな此の花鳥風月を樂しんだものだ、花鳥風月を樂む者常に仙人ばかりではない、幽霊と御同様のお錢のない連中は是れにかぎる、花鳥なんかは且らく措き、鹽辛い汗が目に流れこむのも堪へて働いて居るものには、涼しい磯臭い濱風がごんなに愉快なものであらう、而してこの濱風が如何に高價であらう、鹽辛い汗の味を知らぬもの、別

莊で濱風に吹かれてる者には濱風の眞價はわからない、お足なしの幽霊には斯様に適当な楽しみがあるのに、之を味ふことをなし得ないで、金錢のかゝる樂みを求めやうとするから、道にはづれたことが起り易いのである『幽霊に濱風』誠に適切なる處世法を教へたものである。

▲盲の垣のぞき

「何々の理由によりて何々なるべし」と云ふのが科學であつて、宗教には決して「何故に」と云ふことを説明し得られないし、またそれを説明する必要はないものである。成程其様であらう、科學ではある假定を設けて、それを土臺にして理屈をつけて何々の故にを説明する、例へばわが視覚と一般人の視

覚と同じと假定せば此の物は白し、而してわが味覚と一般人の味覚と同じと假定せばこの物は鹹し、この理由によりて是れは食鹽なりと云ふやうなものである、所が宗教は左様でない「斯く信せずには居られないから斯く信する」と云ふだけであつて、斯く信せずには居られないと云ふことにも、何々の故に斯く信せずには居られないと理由をつけるではなしに、斯く理由なしに斯く信せずにはどうも氣がすまぬと云ふのである、それについてむかし或時或處に或坊さんや或坊さんでない人どがあつた、そのある坊さんでない人がその或坊さんの處へ来て問ふて云くに『地獄極樂はほんどうにあるものかないものか』坊さんは答へて『知らぬ』と云ふた所が、その人押し返して『地獄極樂があるなかいか知らない癖に自分も信心したり、人に信心を勧めたりするのは何のこつた

むだ事じやないか』と云ふ、坊さんは徐かに『貴殿外出する時に雨天であつたら如何する』と問ふと、その人『雨具を持つて行く』『日和の時には如何する』『雨具を持たずに行く』曇天の時には如何する』『雨具を供人に持たせて行く』『雨具を持つて行て雨が降らなかつたら如何する』『其儘持つて歸るまでのこと』『それでもむだに持つて行つてむだに持つて歸るのか』『持たずに行つて若し雨が降つたら困るからよ』左様だ、拙僧の信心も地獄極樂はなからうと思ふて居て、若しあつた節には當惑せねばならぬ、あるものと思ふて信心して居て、若しなかつてもそれまでのこと、別に損にはなるまいじやないか』と、斯様云はれたのでその坊さんでない人はウンといきつまつた、繰り返して云ふ、宗教は信すべきものである、それを科學や哲學をもつて彼れ是れ云ふのは盲の垣覗き

ではあるまいか。

▲身は身で通る

身は身で通る、そんなら衣服は衣服で通り家は家で通るのか、何のこゝだサツバリ意味をなさぬやうであるかなあ、いや／＼若し身が身で通らなくて、身が衣服で通つたり、身が家で通つたりしたら如何だらう、否昔も今もかはらぬ身が身で通らないで、身が衣服で通つたり、身が家で通つたりする者の多いに困る、汽車や電車の中でピカ／＼するフロツクや、或はキュ／＼云ふ五ツ紋でも着て居らうものなら、田吾作さんは恐がつてその側へはすわらない、その外服装の美しい者に對しては一寸物を言ふにも鄭重である、すべて幅がきく、

是れ身が衣服で通つて居るのである、家柄門閥に生れると無學でも何でも若様だ何だと持ちあげられ、公爵や侯爵の家に生れば馬鹿でも何でも貴族院議員さまだ、是れ身が家で通つて居るのである、或は身が階級で通るもの、肩書で通るもの、父祖の權威や先輩の餘威で通るもの杯色々ある、こんなものが多數大手をふつて通るのは、通る側の人は便利であらうけれど、通られる側の者は大に迷惑である、しかし一般の人が身と衣服や家や階級や肩書やのやうなものを區別することを充分に知らないから、斯様なものに横行闊歩せられるのである、大臣で居る時には到る處で歓迎せられたものが、一朝野に下ると誰も見向いても呉れなくなる者もあり、大臣でなくつても到る處で大臣以上に歓迎せられる一私人もある、即ち衣服で通つて居る身は衣服を脱がせば通れなくなる

家で通つて居る身は家を逐ひ出せば通れなくなる、身が身で通つて居れば裸一貫の儘で何時何處へ出しても通れるのだ、それに就て陳腐な話ではあるが一休和尚の話をして見やうか、京都にけちんぼの大福長者があつた、その長者が大法會を勤めると云ふので一休和尚の所へ案内があつた、和尚はその日に破れ衣で、笠きて、竹杖ついて、杖もつて、長者の家に行つて、門口に立つて、『今日は大法會じやそうなお残を頂きませ』と云ふと、家の人が出て叱りこばす、和尚は『左様に云ふものではござりません何か下さりませ』と云ふと、主人が下男に云ひつけて叩き出してしまつた、和尚は寺に歸つて、紫の衣に緋の袈裟と云ふ美服で、駕に乗つて行くと、家の者が皆出て來て懇ろに挨拶して御馳走の數々を前に並べた、和尚は衣を脱いで膳の前に置き『この御馳走はわ

しに呉れたのでなくて、衣に呉れるのだらうかの』と言ひながら、トットと立ち去つて了つたと云ふことである、これと似よりの話が大智度論の第十四卷にもある、つまり是は身が身で通らない横着者や、身で通らうとするのを嫌ふて虚偽の裝飾をありがたがる世人を誡めたものである、身は身で通る成程結構構。

▲吝嗇漢のかきのたね

吝嗇漢と云ふのは自分に取ることばかり考へて、出すことは至つて嫌な、慾張り者のことである、猿が柿の種を持つて居た、蟹が甘い饅頭を持つて居た、猿は吝嗇漢であるから、自分が持つて居る柿の種を出して、蟹の持つて居る饅

頭とかへことをして、甘い〜と食べてしまつた、蟹は賢いから、その柿の種を畑に植ゐて、芽を出さして、肥料をかけて、大きな柿の木にして、柿の花が咲いて、大きな甘い柿が澤山實るやうにした、饅頭には種がないから、畑に植ゐて、芽を出さして、肥料をかけて、大きな饅頭の木に育てあげて、大きな甘い饅頭を澤山實るやうにすることはできない、だからしわんぼうの猿は、食べられない柿の種と甘い饅頭と交易したのだから、大そうトクをしたやうであつた、けれども饅頭はたべてしまふたら後に饅頭の木が残らないから、大そう損をしたことになつた、これがしわんぼうの柿の種と云ふことであらうけれど、モ一つしわんぼうの垣の因と云ふことを心得て居て貰はにやならぬ、しわんぼうの垣の因とは何であるかと云ふに、古歌に

惜し欲しいにくいかわいと思はねば

今は世界がまるでわが物

我と云ふ小さきものをすて見よ

三千世界にさはるものなし

と云ふのがあるが、成程與ふべきは與へ、盡すべき道は盡して、人と睦まじくして信義を以て交際すれば、四海の内はみな兄弟同様で、共に胸襟を開いて腹藏なく語り合ふこともできるが、惜しほしいにくいかわいと思ふ所の小さき我と云ふ物、即ちしわんぼうと云ふやつがあるために我と人との間に墻壁が高くなつて、握手することも打ち解けて語り合ふこともできないのである、誠にこの惜しほしいのためには兄弟骨肉相争ひ、父子夫婦相離れると云ふやうな憂

目を見ることもある、欲張りの猿が柿の種で損をしたか得をしたか、其様なことはどちらでもよいが、何卒客齋で垣を造らないやうに心がけることは必要なことと思ふ。

椽の下に九太夫

何だそんな「いろは諺」があるものか、それは忠臣蔵じゃないか、成程左様だ、「いろは諺」のは「椽の下に舞妓」と云ふのだつた、しかし「椽の下に九太夫」と標題を出したものだから、このまゝ續けて書くことにしやう。

昔から「壁に耳あり爛徳利に口あり」と云ふて、人は酒を飲むと口を迂らして云ふまじきことを云ふ、誰も聞いて居る者はなからうと思ふて内幕事を話し

て居ると、誰がきくごなくそのことが他に漏れる、由良之助程の智慧でも、秘密書類を読んで居るのを、椽の下に忍ぶ九太夫に見られると云ふやうな手ぬかりがあつた、左様だ、壁に耳あり椽の下に九太夫ありだから、よく慎んで滅多なことを云はないやうにして、壁について居る耳や、椽の下に忍ぶ九太夫や杯に知られないやうにしなければならぬ、けれども心に思ふて居ることは、知らず識らず口走ることがあるから、知られずにはすまない、隠れたるより顯はるるはなしだから、最初から心に内密を收めないのに限る、心に内密なく疚しき所なく公明正大であれば自己の思ふ儘のことを言ふて、而も何處にもあたりさわりが無い、けれどもお互凡夫は古歌に所謂、

我心鏡にうつるものならば

さぞや姿のみにくかるらむ

で、なか／＼公明正大の内密なき心にはなれない、それに就て斯様な話があるある處に信心青年と云ふ人があつた、この青年だとして生れだちから信心して居たのでもなく、生れだちから青年ではないから、始めから信心青年と云名ではないが、この青年が年の若いのに信心するから、近所の友達が何時の間にかこの人を信心青年と呼ぶやうになつたのである、この信心青年が常々信心して居るのを反達が見て、「信心して居る者はどれだけかちがふ所があるだらう、ためして見やうじゃないか」と、お寺の賽銭箱の側に錢入を置いておいた、そこへ信心青年が參つて佛さんを拜んで居たが、そつとその錢入を拾ふて袂に入れて歸りかけて、突然、寺の門の所から引きかへして、つゝましやかに御堂に立ち

戻り、元の所へ前の錢入を置いて歸りかけて居ると、友達數人が出て来て「君は今御堂で何か拾ふたやうであつたが、歸りかけて居て、また引きかへしたの一體何如したのであるか」と尋ねると、青年は「イヤ今賽盤箱の傍に錢入が落ちて居るのを見て、凡夫心の淺ましさに、持つて歸らうとして歸りかけたが思へば勿體ない、今の今まで三世十方を照覽します佛さんが見てござること気がつかなんだ、勿體ないことをした、佛さんが見てござる前でもしい行為をしたものだと恐しくなり、その錢入を元の所に返しに行て来たのである、錢入を拾ふたのは私の凡夫心、その錢入を元へ戻す心になつたのが佛さまの御慈悲、まあ諸君お笑ひ下され」と物語りたそうである、この通り壁の耳や椽の下に九太夫に知られてはならないやうなことを、考へたり云ふたり行はんとす

る時に、いや／＼これは不可いことであると思ひ止まるのが、佛さんを信心するおかげである、讀者諸君何卒怠らず信心したまへ。

▲瓢箪から駒が出る

代數ならば兎も角、算術では一から九引くと云ふやうなことはできない、小さい瓢箪から大きな駒が出ると云ふ筈がない、瓢箪からは酒が出るのだと云ふかも知れないが、代數的に小さい瓢箪から大きな駒が出ぬとも限るまい、一體瓢箪と云ひ駒と云ふのは何であるかを先づきめておかねばならぬ、瓢箪は酒を入れる器である、駒と云ふのはヒドクはねまはるものである、馬の中でも驢馬はさほどはねまはらないが、ある人の狂歌に「午ならばなほこの上にはねるら

む、丑の年でも寛文元年』と云つたやうに、馬は跳るものと昔からきまつて居る、その馬の中にも駒は一層よく跳るものだ、だから駒と云ふのは跳まはるもの、總代に出したまで、あつて、はねまはるものは馬や駒にかぎつたことはない、尻の軽い娘もはねまはるからお轉馬と云ふて馬の中に分類するじや、ハイカラ男の輕薄才子もはねまはるじや、野心家も名聞家も誇大狂もはねまはるじや、酒醉男も随分はねまはるじや、左様だお轉馬もハイカラ男も野心家も酒醉男も皆跳まはるから駒の中に屬して置かう、お轉馬やハイカラ男は且らく措き、酒醉男が瓢箪から出ると云ふのに異論はあるまい、たごゐ瓢箪の中から男が出て來なくとも、酒醉男が出て來ると云ふのは事實だ、それを孔子様は『酒にきまつた分量と云ふことはないが、亂に及ばぬ程に飲むがよい』と云ひ、釋

迦様は『酒は迷亂し罪を起すの基なり』と仰せられてある、何故に釋迦様が左様に仰せられたかと云ふに、ある處に酒好きの坊さんがあつて、微醉機嫌で境内を散歩して居ると、隣家の鶏が來て居るのを見て、面白半分を追ひまはして居たが、しまいにはそれを捉まへて持ち歸り(盜罪)て、ねぢ殺して(殺罪)それを肴にまた酒を始めた、隣家のお内婦さんがやつて來て『私方の鶏が此方へ來はしませんでしたか』と問ふと腥坊さんは『知りません』と答へた(妄語罪)お内婦さんは其あたりに鶏の羽毛が落ち散つて居るのを見て詰り問ふと坊さんは怒つてその婦人を捉へて犯した(邪淫罪)この坊さんだとして最初から腥坊さんではなかつたけれど、酒癖が悪いのに酒を飲んだものである、斯様な大罪を犯すに至つたのである、春日潜庵の自警の文にも『吾酒を飲まざれば

業を廢せず、業を廢せざれば徳茲に進む、吾酒を飲まざれば驕泰ならず、驕泰ならざれば徳茲に進む、吾酒を飲まざれば淫心生せず、淫心生せざれば徳茲に進む、吾酒を甘じて、而して業修るを加へず、徳進むを加へず、以て人となるを得ず、夫れ酒の徳を失ふ此の如し」とある、誠に酒は「百薬の長」ではなくて「百厄の兆」である、「憂の玉箒だ」と云ふから憂を掃き集めて山程に積み重ねるのであらう。瓢箪から駒が出る、ヤレ恐やの恐やの。

▲餅はもちや

世の中が開化して來ると分業と云ふことが行はれて、何事も専門になつて發達するのだから、餅はもち屋、うどんはうどん屋と云ふやうに、それ／＼藝は道

によりて尊しと云ふ、しかしながら一方には「名物に美味しいものなし」と云ふではないか、うどん屋の亭主どの腹立てなざるなよ、うどん屋のメリケンうどんよりは農家の手製のうどんが美味いと示ふことだ、従つて餅は餅屋に限るなんて云ふのは以ての外の誤で、餅だとしてその通り、お父さんが搗いて、お母さんがちぎつて、姉と弟とが膝を並べて小さい手で揉んで、一家内團樂してたべるのが一ばん美味いのだ、今「餅はもちや」と云ふたのは外に意味がある。

釋迦如來が成道してから始めて迦毘羅城の父君淨飯王を訪問した時に、父王は「太子（即ち釋迦如來）が城を出て後、妃の耶輸陀羅姫は太子の山中に於ける苦しい修行に同情して、毎夜土間の隅に蓆を被つて寝た程である、だから何ぞ優しい言葉をかけてやつて呉れるやうに」と云ふことを釋迦如來に願ふた

釋迦如來は委細承知して、耶輸陀羅妃の室へ行くと、妃は六年間戀ひこがれて居た太子に逢ふことができたのだから、感極まつて如來の足に抱きついたまゝ、物も頓に得言はなかつた、如來は城中で食事をすまして弟子共を連れて宮城を出て去つた、妃は世にも稀なる好い人と永く別れるのが悲しくてたまらず、小田巻くりかへし昔を今になして、太子と團樂の樂をうけたい、何かな太子が心變りして還俗するやうになる方法はないかと心配して居ると、ある梵志が、『百味の歡喜丸に藥味を入れて呪禁をすれば、それを食べると心が變つて還つて來るものです』と云ふから、妃は藥味入りの歡喜丸即ち餅を作りて如來に供養した、如來はそれをたべてから平氣でお寺へ歸つてしまつた、夕方になつたら戻つて來るだらうと待つて居たが戻つて來ない、翌日になつても戻つて來

ない、妃はあの藥味入りの餅でも効力がないのかと氣が様でない、佛の弟子が城内で此噂を聞いて、斯程の魔力のある餅をたべて、而も心が蕩けないとは、流石に佛の神力は不思議である、此のことを如來に申しあげた、如來は『なアに如何な藥品が入つてあらうとも餅は餅や、物質上の餅は肉體上の飢餓を凌ぐだけで、精神までも奪ふことは決してできない、それも煩惱の離れない在俗時代ならば兎も角、今や如何なるものを以てしても我が心を奪ふことはできない』と仰せられたと云ふことが、大智度論第十七卷に出て居る、餅は餅や、物質的の力は物質的肉體的の缺陷を補ふだけだ、物質上の如何なる力を以てするとも、我確乎たる精神までも奪ふことができるものか、と云はれた如來の金言は強い力があるではないか、何でもなしこのやうではあるが、いよ／＼之を

實行すると云ふことは随分何でもあるのだ、その證據には御馳走計略や公密錢主義が着々効力をあらはして居るではないか、しかし斯様な歌があるのを承知せねばならぬ、

名利とは魔王の釣の糸ぞかし

餌につく魚の身のはてを見よ

▲雪隠で饅頭

如何ないやしんぼでも雪隠で饅頭を食ふ者もあるまいが、若し事實食ふたらどんな味がするであらう、鳥の舎も雪隠で饅頭を食ふた経験がないから慥なことは云へないが、たどひ雪隠の中で食ふたからとて、饅頭が唐辛子のやうに辛

かつたり、千振草のやうに苦からう筈がない、やはり甘いであらうと思ふ、此様なことを穿鑿するのは外でもない、信仰と云ふことの味が充分に判つて居れば、佛さまや神さまの前に行た時はかりでなしに、行住坐臥晝夜四時に亘りて時と處を簡ばず、何時もその信仰が味はれ、従つて何時もその信仰が働いて居らねばならぬ筈である、鳥の舎が先年東海道線で旅行した時に、瀛車が馬場驛を京都に向つて發車して、大津の隠道にさしかゝらんとして居るのに、自分の前に立つて居た一人の客が、荷物の中から茶道具を出して、先刻停車場で買ふた土瓶の湯で薄茶をたて、竹の皮包みの饅頭をそへて、さもうまそうに飲んで居る、如何にも珍しいことであるから、自分は「貴殿茶道は餘程の御熱心と見えますが、それにしても斯様な人込みの瀛車中でまで茶を立て、飲むにも及

びますまい』と尋ねた所がその人の答へには「自分は毎日茶を立て、飲んで居る、成程瀛車中は騒がしいけれども、やはり我が生涯の一部分だから我家に居るのと同じやうにして行くのです」と云ふた、成程風流を樂む者は斯くあるべき筈である、これと同じく寺の御堂や佛壇の前に坐つた時ばかりが信仰家の生涯でなく、生活向の業務をして居る時も人と話して居る時も、道を歩いて居ても家に臥て居ても、何時も信仰生活の一部分であることを忘れないやうでなければならぬ、これを發菩提心論には「諸佛菩薩昔し因地にいまして此心(信心のこと)を發し已はつて、成佛に至るまで時として暫くも忘るゝことなく、誓心決定するが故に魔宮震動す」とある、斯様に不動の信仰を持つて居れば嬉しいこと悲しいこと皆悉く信仰の光明によつて淨化せられるから「天道是か

非か」杯と泣言云つて、鐵道を枕にしたたりすることはない、この信仰が定まれば凡て日常の行爲が佛道修行となるのである、般若理趣經の中に「衆生を救濟するは諸の如來に廣大の供養をなすになる」とお説き遊ばされてある。

▲雀百まで踊忘れぬ

雀百まで踊忘れぬと云ふけれど、昔から秋の節に「雀水に入りて蜃となる」と云ふのがあるから、蜃になつたら砂の中にすつこんで居るばかりで、とても踊なんかやれないであらうと思ふが、如何したものであらう。鳥の舎曰くじや雀と云ふても水に入つて蜃に變化するやうなものではない、雀と云ふのは何かと云ふと、雀はビヨン／＼とよくとびまはり、チエン／＼とよく喋舌るもので

非か」杯と泣言云つて、鐵道を枕にしたたりすることはない、この信仰が定まれば凡て日常の行爲が佛道修行となるのである、般若理趣經の中に「衆生を救濟するは諸の如來に廣大の供養をなすになる」とお説き遊ばされてある。

▲雀百まで踊忘れぬ

雀百まで踊忘れぬと云ふけれど、昔から秋の節に「雀水に入りて蜃となる」と云ふのがあるから、蜃になつたら砂の中にすつこんで居るばかりで、とても踊なんかやれないであらうと思ふが、如何したものであらう。鳥の舎曰くじや雀と云ふても水に入つて蜃に變化するやうなものではない、雀と云ふのは何かと云ふと、雀はビヨン／＼とよくとびまはり、チエン／＼とよく喋舌るもので

ある、これは佛性の靈々妙々なる活力あるのを譬へて雀と云ふたものだ、また百までと云ふのは數の百ではなく、大數に就て云ふたもので、百までと云ふたら盡未來際何時までもと云ふことである、それでこれを纏めて云へば、靈々妙妙の活力ある佛性は盡未來際何時々までもかはらぬ」と云ふことになる、その佛性と云ふのは一體如何様なものかと云ふと、佛さまと一寸も異らないところの性質で、それはだれが持つて居るかと云ふに、涅槃經には「一切の衆生に悉く佛性あり」と説かれてある、人には人格と云ふものがある、その人格は何處がどの様なものとも云ふことはできないが、その形式から云へば慈仁とか博愛とか道義心とか自尊心とか云ふやうなもの、綜合體である、而して是等の博愛とか道義心とかは「吾は人である」と云ふ自覺が最も根本である、此の自

覺のない人でも人格はあるのだけれども、外部に作用として現はれはせぬ、佛性も一切衆生にあるのだけれども、佛陀としての自覺がないから、佛陀としての作用ができないのだ、また白隱禪師の粉挽き歌には「空も月日も海山かけて土も草木も皆主心」と云ふてあるが、この主心と云ふのがつまり佛性である、元來佛性は何れの處にも到らぬ限はない、而して天台宗や眞言宗杯實大乘の宗旨では「心と佛と衆生とは別でない」と教へるのであるから、主心と云ふのが佛性のことであり、心が何れの處にも到らぬ限はないと云ふことになるのである、このことをある西洋人が「天地間に最も大なるものは人なり、人に於て最も大なるものは心なり」と云ふてある、佛さまと云ふのも外ではない、この天地間で最も大なる心を悟りたお方のことだ、それを大日經には「如何が菩提

とならば實の如く自心を知るなり」とある、この實の如く自心を知たものは即ち「吾は佛陀なり」との自覺を得たもの、言かふれば轉迷開悟した者であつて、この悟りを開いたものは如何なることができるかと云ふ、般若理趣經に「大精進を以て常に生死に處り、一切を救攝し利益し安樂ならしめ、最勝の究竟を皆悉く成就せしむ」と説かれてある、こう云ふ深い意味のあることを雀百まで踊忘れぬと、平凡な普通の事から説明するのが、即事而眞の法門と云ふのであらう。

▲京に田舎あり

京と云ふのは文明の程度の高い都會のこと、田舎と云ふのは文明の程度の低い處のことであつて、此諺の意味は「進歩せる都會も進歩は全般でなく、或

部分には大なる缺陷があると云ふ意だ一杯と解釋しやうものなら、都會の人も田舎の人も共に怒るのみならず、全く諺を殺してしまふから、其様な解釋をしてはならぬ、都會と云ふのは智識程度の高い處だ、商人が商賣をして利を計る處だ、依て智の表象、自利の表象である、田舎と云ふのは人情の淳朴な處だ、農人が耕耘をして稲や豆を養ふ處だ、依て情の表象、利他の表象である、現今しきりに修養々と云ふて居るが、その修養と云ふのは完全なる人格を作ること外ならぬ、完全なる人格とは何であるかと云へば、智と情と（委しく云へば智情意）の統一せる發達を遂げたるもの、謂である、智と情と孰れに偏ししても完全なる人格とは云はれない、佛陀には四無尋辯、四無所畏、六神通八勝處、九次第定、十偏處、十八不共法と無量の徳があるけれど、要する

所智慧と慈悲との外はない、この二徳が佛の自利利他の徳である、智慧と慈悲自利の利他、この二徳の中何れが缺けて居ても佛陀とは云はれない、龍猛菩薩の發菩提心論に菩提心の體をば三摩地心即ち佛と衆生と平等なりとの確信としその作用を勝義行願の二心即ち智的の一向志求一切智々と慈的の必當普度法界衆生の二方面と云ふやうに分けてあるのも、右に述べたのと同じことに歸するものと窺はれる、智と情との何れか一方に偏せる者、即ち京に田舎なきもの又は田舎に京なきものは完全なる人格でもなく、また佛果を目ざして佛道を修行するもの、正しき方法でもない、京に田舎あり、智に兼ぬるに情を以てす、何と簡單にして要を得た修養法ではないか。

いろは諺新釋終

大正三年九月三十日 印刷
大正三年十月四日 發行

著者 吉

祥眞雄
京都大宮四年大道寺

發行者 藤

井佐兵衛
京都府下京區寺町通五條上ル
西橋町二十二番戸

印刷者 小

林庄太郎
京都府下京區サメク井通魚橋上ル
佐女牛井町三十二番戸



發行所

京都府下京區寺町通五條上ル
電話大坂三五一五八五

山城屋藤井文政堂

文政堂巽兌

325
231

終

